

偉人百話

學海依田百川先生序文
鬼雄外史撰著

東京 二書房發行

004098-000-5

特64-951

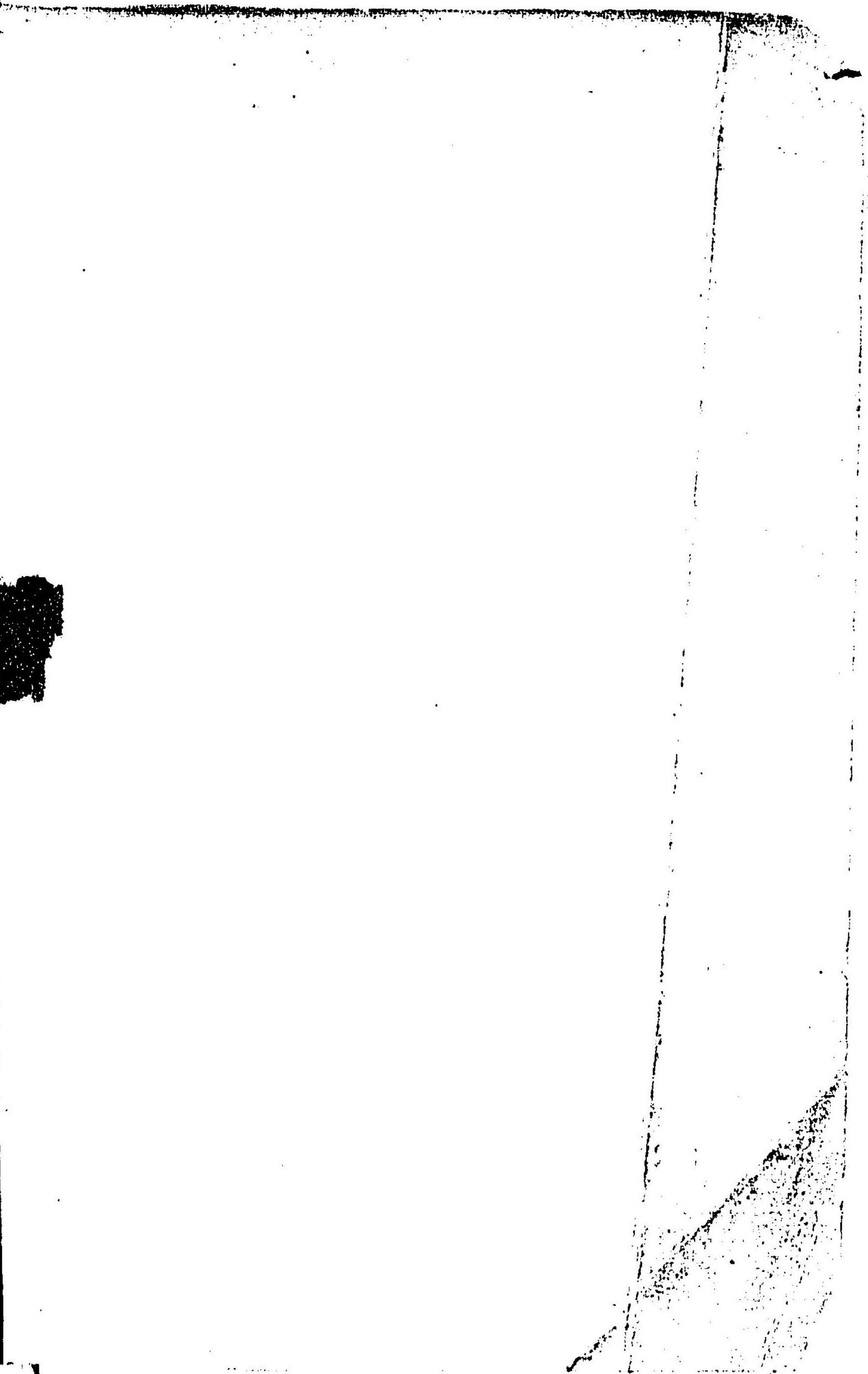
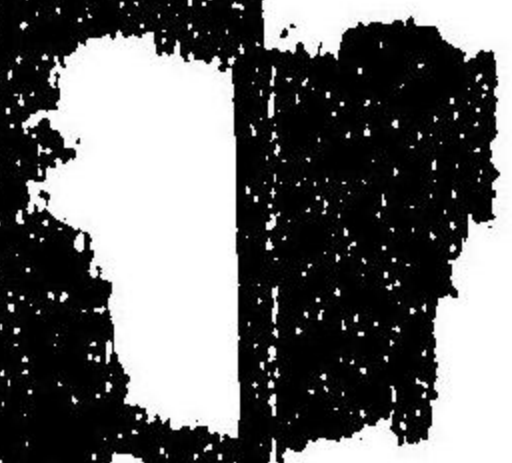
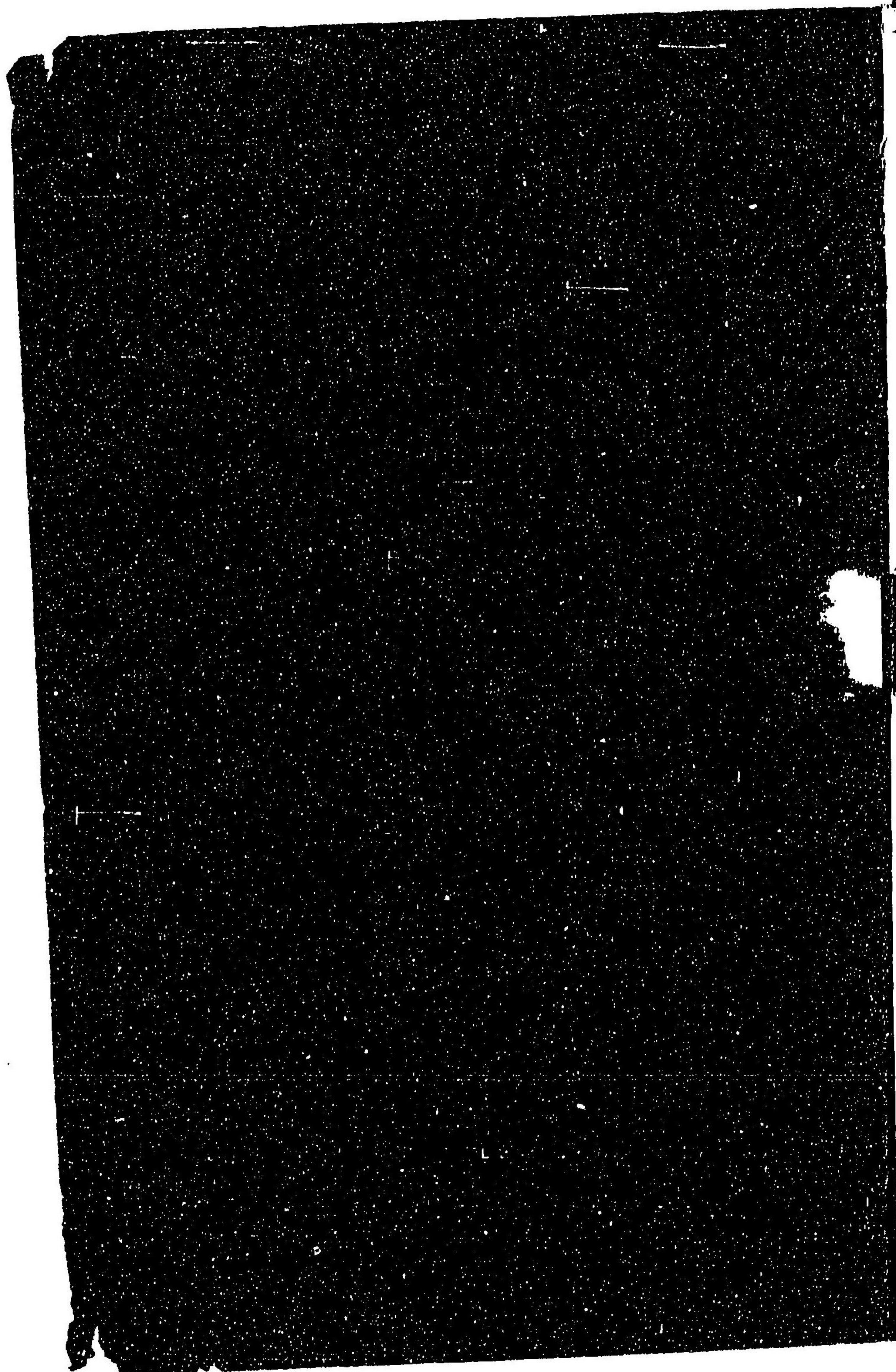
偉人百話

鬼雄外史/著

M32

ACE-0439





壯士 偉人 百話 自序

今夫れ吾人人體を將ゐて、解剖學上より之を觀察し、而して
 後ち一片の生氣を吹込み、併せて生理學上より之を觀察せん
 に、人體は實に是れ骨子を以て、之れが直立活動の根本と爲
 す。若し夫れ人にして骨子をくれば、則ち鯨魚の入道のみ、
 蒭蒭の幽靈のみ、亦何ぞ人として直立するを得んや、顧みて
 人其心術に於けるも亦然り、腦中一片の活火氣骨あるを以て
 男子の男子たる本分とす、若し夫れ腦中一片の氣骨をからん
 か、是れ即ち平家の無骨上臈のみ、否を寧ろ腐敗黴女のみ、
 何ぞ男子を以て目すべけんや、實に豪氣は、男子としての蒸
 氣力なり、又男子進前歩武の電氣力あり、故に男子一たび此
 の猛氣を發せば、百事到る所に成功せん、今れ夫本書は、上
 寛永より、下明治の今日に至るまで、二百五十年間、既に故

人の録中に入れる、腦中萬丈の氣焰天を衝んとする、氣骨男子の百話を輯録したる者にして、後進子弟の爲め、百事成功の元素たる氣育を興ふる者あり、蓋し元龜天正、及び文祿慶長戰國の兵亂既に收ると雖も、日本男兒の氣概は、其形狀を變へて、百道方面に現はる内に包藏する者、遂に發せざるを得せ、即ち本書は其日本魂の猛發する、精粹縮圖なり、之を龜鑑とし、其英氣を他に應用し、日常の行爲に利用する者は、讀者の任たる可し、今や我邦の形勢は、百事極めて氣骨を要するの時、若し尋常無骨、柔軟的腐敗小説の亞流として看做ることなくんば幸甚。

明治三十二年 月 鬼雄外史識

英而
金書讀未文公名臣言行録在
言確論層見疊出加心性行
履歷真一不為學者撰記者
焉後世倣之有歷代名臣言
行録雖有及文多之者亦是以
其後學感興人心矣然其
所載止高官之英賢顯位之

才俊未及卓犖之名士民間之
奇傑也夫高官顯位之嘉言
某行或銘於前帶或錄於典
策炳焉若馬廐後人之表
章也若夫專制之朝人卑民庶
世尚門族雖有卓行偉論舍而
不顧身而不錄歷年稍久湮滅

不傳豈不可惜乎頃有鬼雄外史
者廣就群籍上自公侯將相士大
夫下至豪商富農工藝伎能之
人苟有異言行履歷可採以為後
鑒金網羅而蒐輯之然後擇其精
拔其粹聚為一卷名曰偉人百話
書肆盛陽堂將乞授之梓來求

余一言近世有福翁百話貧叟百
話等書並漫錄其所自得焉而此
則一書而群賢集一篇而百話
具比之宋友歷代言行錄所載
頗廣所舉頗公若擴而充之以
及海外賢哲使學者感興誦養
者豈不云哉不可以一時漫錄

之類視之也乃喜而為之序

明洪己亥七月

東京學海依日下小模



壯士 必讀 偉人百話目錄

◎勝 安房

(三話)

◎西 鄉 隆 盛

(五話)

◎大 村 益 次 郎

(三話)

◎熊 澤 蕃 山

(三話)

◎新 井 白 石

(三話)

◎物 徂 徠

(三話)

◎山 崎 闇 齋

(一話)

◎賴 山 陽

(三話)

◎大 久 保 利 通

(三話)

◎木	◎橫	◎北	◎山	◎大	◎島	◎山	◎坂	◎平	◎大
戶	井	條	鹿	石	澤	內	本	賀	鹽
孝	小	安	素	良	久	容	龍	源	平
允	楠	房	行	雄	光	堂	馬	內	八
(一話)	(一話)	(一話)	(一話)	(三話)	(一話)	(一話)	(一話)	(一話)	(一話)

◎山	◎高	◎林	○蒲	◎近	◎高	◎間	◎原	◎支	◎小
田	山	子	生	藤	田	宮	田	倉	笠
長	彦	平	君	重	屋	林	孫	六	原
政	九	平	平	藏	嘉	藏	七	右	貞
(一話)	(一話)	(一話)	(一話)	(一話)	兵	(一話)	郎	衛	願
					衛			門	

○濱田孫兵衛	○紀伊國屋文左衛門	○鐵屋五兵衛	○白川樂翁	○上杉鷹山	○渡邊華山	○高野長英	○梁川星巖	○佐久間象山	○德川光國
(一話)	(一話)	(一話)	(三話)	(三話)	(一話)	(一話)	(一話)	(一話)	(一話)

○德川齊昭	○藤田東湖	○武田耕雲齋	○吉田松陰	○高杉晉作	○久坂通武	○二宮尊德	○河村瑞軒	○岩崎彌太郎	○田中平八
(一話)	(四話)	(一話)	(一話)	(一話)	(一話)	(一話)	(一話)	(一話)	(一話)

◎近	◎堀	◎河	◎雲	◎僧	◎僧	◎平	◎願	◎梅	◎橋
藤	織	井	井	清	野	三	三	田	本
勇	部	繼	龍	月	國	樹	三	雲	左
	正	之	雄	照	臣	郎	郎	濱	內
(二話)	(二話)	(二話)	(二話)	(二話)	(二話)	(二話)	(二話)	(二話)	(二話)

◎清	◎大	◎松
川	岡	平
八	忠	信
郎	相	綱
(二話)	(二話)	(三話)

壯士
必讀
偉人百話目錄終

壯士
必讀

偉人百話

鬼雄外史撰著

鬼雄外史曰く、年代不順、席位不同は、蓋し逸話の昧然りとする、新古錯綜意外より出て、更らに又意外なる人物出づる所、妙自ら其間に在り、故に今夫れ本書の編次、亦年代不順、席位不同の故例に倣ふ、但し同一氣概其関連の人物は、成るべく隣席に併列して、近く其氣脈と通すと云爾、

◎勝安房

○見倒し漢の龍驤

世に精勵苦學、勝安房の如きは、多く其の比を見ざる所なり
世人は、維新の際、勝安房の位置、彼れが如く重要なるを見

れば、初めより幕府旗下の内に於て、高祿に食みしものと思ふべしと雖ども、其の實は然らば、彼れ其の少壯の頃は、其の名も麟太郎とて、三十俵二人扶持なる、甚だ貧困の御家人あり、故に一冊の書籍を求むるも容易の業に非らば、去れど元來其性頗ぶる書籍を好むの身は、苦心慘憺、諸子百家の書を涉獵せんと欲し、遂に案じ出したる一策は他に非らば、日本橋通二下目の書肆、須原屋の店頭に赴き、彼是れ書籍を冷かしながら之を通讀して立去るを常とせり、去れば當時同店にては、麟太郎の顔さへ見れば、「又例の見倒し漢來れり、とて、甚だ五月蠅かれり、人情固より然り、然れども敢へて之

を意に介せず、益々く冷かして平然通讀するは、麟太郎の精勵苦學なり、

茲に松前の船持にて、山七と通稱するものあり、本名は光本七藏と云ふ、家業には似合はぬ讀書好きにて、江戸へ出京すれば、今の赤治、即ち渡邊治右衛門方を宿とし、何時も彼の須原屋へ往きて、多くの書籍を買入るゝを以て、同店にては大得意の客として、鄭重に之を待遇せしが、恰かも好し一日此の山七が來合せたる時、「又例の見倒しが來た」と店の者の口々に云ふより、山七は甚だ怪みながら、「一体見倒しとは如何なる故ぞ」と其の仔細を聞いて、山七は膝を拍て大に感嘆

し、番頭に謂て曰く、扱ては其の見倒しと呼ぶるも男、察するに學を好める秀才あらん、而かも其の資力の乏しき所、苦心慘愴、此等の見倒しども爲すことあらん、我れ一たび面會して、其の人を見んと欲す、此の後ち店頭に来らば、速かに我が宿へ知らせよ、との命に、番頭唯々として之を領承す、既にして又の日勝麟太郎、須原屋の店頭に来れるにぞ、番頭は早速小僧を走らせて、山七の宿へ急報すれば、山七點頭して、直ちに須原屋へ馳付け、側面をがらに熟々之を見るに、果して有爲秀才の狀貌顯然たるものあれば、山七は辞を卑らし、「扱てく足下の心懸けには感じ入りたり、我れ深く足下

の心に感ざるの餘り、爾來足下を以て、我が書籍買入の代人に依頼致し度く存せ、但し書籍代金は足下の申越さるゝまゝに、赤治方まで送出すゆゑ、足下の望まるゝ書籍あらば、關書あり漢藉なり、又和書あり、何にても隨意に求め玉へ、已に之を求めたる上は、足下先づ讀んで、而して後ち徐ろに我方へ送越し玉へ、との世にもいと頼母敷き言葉に、麟太郎は一時夢かどばかり想ひ、我が知己を得たるを喜び、是れより意外にも奇特の金主を得て、須原屋より百種の書籍を求めて、日夜之を誦讀せしかば其の勞力大いに進歩せりといふ、麟太郎の精勵苦學、致へて喋々せずして可なり、山七も亦稀代の

奇人、否を寧ろ稀有の仁人と云ふべし

○苦心慘憺絶類の寫本

今茲に叙迷する所は、蓋し未だ山七の金主を得ざる前のみならず、其の苦心慘憺、絶類の寫本は、鬼神も尙ほ且つ其の壯烈に感ぜべしといふは他に非らず、麟太郎壯時、西洋式の兵術を學ぶに、當時舶載の兵書極めて少く、常に其好書の得易からざるを歎き、偶ま／＼坊間の一書林に、新刊舶來の兵書を賣るものあり、麟太郎之を一見するに、實に得難き好書あり、心竊かに之を購はんと欲し、試みに其の價を問へば、五十兩なりといふ、嗚呼當時の五十金は、實に今日の五百金

將た又千金にも當れり、而して願みて當時麟太郎は、區々たる一介の顔貪書生なり、五十兩の金、豈に容易に得べき所あらんや、去れども其の必らず之を得んと欲するの決心は、恰かも磐石の如く、亦動かすべからず、苦心經營、奔走十數日を経て、漸くにして五十金を集め得て、彼の書肆に至り、前日の書を求めんとすれば、アテ遺憾や、已に他人の買ふ所と爲りて、其の影を見ず、麟太郎の遺憾察をへし、麟太郎は千遺万憾、殆んど切齒して其の人を問へば、則ち曰く、「四ッ谷の與方某の購ふ所なり」と麟太郎之を聞くより、直ちに歩を轉じて、四ッ谷に至り、以て某の門を叩き主人に面會し、切

八
に情を陳じて、其の兵書の讓與を乞ふ、某聽かず、麟太郎已
むを得ず、更らに借覽を請ふ、某尙は聽かず、是に於て麟太
郎曰く、「晝間は足下に必要ならん、然れども夜間は或は不必
要ならん、足下已に寢に就くの後ち、割受するも敢て差支か
かるべし、」と某は餘りに麟太郎の執拗なるに驚き、答へて曰
く、「然らば夜分四ツ時を過ぐれば割愛せざるも可なり、然れど
も大切の書、之を戶外に持出すを許さず、」と茲に嚴格の制限
を以て、僅かに之を借覽するふとを許されたり、随分困難の
制限と云ふべし、然れども麟太郎の心に於ては、千因万難敢
て問ふ所に非らず、只だ夫れ借覽を許されたるを無上の悦び

に、乃ち其の翌夜より通勤を始めたり。

當時麟太郎は、本所錦糸堀に住と、與力某の家、四ツ谷大番
町を距ること、殆んど一里有半、敢へて苦とせせ、或は雨の夜
雪の晨と雖ども、曾て其の往復を廢せき、又一夕も其の時刻
を違ひことなし、而して麟太郎の心にありては以爲らく、斯
る貴重の書、之を一瞥して廢すべきにあらず、宜しく手寫し
て後ちの研究に供すべし、と嗚呼驚くべし、卷秩浩瀚ある、
細密原書の全寫を始めたり、去れば某の門衛は、其の精勤に
驚き、後ちには待つに鬼神を以てす、此の如きもの半歳有余
苦辛慘憺、終に八卷の兵書を全寫するを得たり、是に於て麟

太郎は、主人に面會し、全部を手寫したることを告げ、其の厚意を謝し、且つ二三不審の点を質問す、主人愕然として曰く、「嗚呼我れに謄寫の勞なくして而かも未だ足下の如く、全部を通讀するの運びに至らば、實に慚愧に耐へば、野人室を擁するも、將た又何にかせん、乞ふ今更めて此の書を足下に呈せん、」麟太郎曰く、「僕已に一部を手寫を又敢へて其の他を要せば、」と之を固辭する再三再四、而かも主人容易に聽かず益すく呈せんとして、愈よく強ひて止まば、是に於て麟太郎も己むを得ば、其の厚意に従て之を受納し、他の寫本と共に之を併せ藏するると十數年、後ち故ありて手寫の本を賣

る、其の價三十圓ありといふ、鬼雄外史、是れまで多く精勵苦學の談を聞くと雖ども、未だ嘗て斯の如き苦心慘憺の寫本あるを聞かざるあり、噫是れ情生の愧殺する所誰れか亦此の談を聞いて蹶然として奮起せざるものあらんや。

◎西郷隆盛

○一戯言の失策

西郷隆盛は、身を持する嚴格、未だ嘗て容易に一戯言を發したることあらば、而かも一戯言の失策より、以て意外の兵糧攻めに遇ふの奇談あり、其れ將た他に非らば、茲に西郷の家僕に熊あるものあり、眼に一丁字おしと雖ども、人と爲り飽

くまで剛毅にして、頗ぶる理義を解と、因て隆盛夙に之を愛し、出入起臥、常に之れと相與にす、一日隆盛太政官に出仕し、例の如く僕熊之れに扈從す、既にして退廳の途次、主從連れ立ちて、市中の刀劔舗に立寄り、古劔類彼是れと視たれど、一口として隆盛の意に適ひしものあり、時に偶ましく一婦人の店頭を通過するものあり、其の容姿艶麗、服装亦華美にして、頗ぶる人の視聽を引くに足る隆盛思はず之を一瞥し傍らに侍せる熊を顧み、低聲にて、「熊よ予も亦彼のやうな正宗の買ひ度きものなり、」と戯るゝに質撲の熊之を聞き、大いに不與の顔色にて、何等の返答もいはさざりしが、既にして

小網町の邸に還るや否や、直ちに主人の前に出で、容を正うして曰く、ア、大丈夫に戯言なし、苟且の言にも、彼のやうな戯言を宣ふものにあらず、と言ひ放ちたるまゝ、己れが部屋に退き籠り、其の後ち一切復た主人の爲めに事を執らせ、以て其の意の決する所あるを示す、隆盛も亦強ひて事を執らしめせ、即ち西郷の家事、爨炊の餘末に至るまで、熊常に之を弁せ、是を以て主從相食はざること殆んど三日、隆盛遂に其の大懶に堪へ兼ね、且つ其の言の甚だ理あるを見、更らに熊を座に延き謝して曰く、「嗚呼我れ過れり、爾來は謹慎を加ふへければ、熊之を免せよと、是に於て主僕摺然相得る元の

如く、隆盛の腹、始めて三日の飯を癒せりといふ、嗚呼西郷三日の兵糧攻め、其の苦亦察すべし。

○南洲の眼中亦台湾をし

明治七年、我が琉球人民難船して、台湾に漂着せしもの、該地土人の爲め、無慘にも生けながら、其の肉を啖いる、我が政府嚇然一怒、遂に台湾征討の軍、彼の地に向ふ、即ち西郷隆盛の弟、西郷從道實に之れが都督たり、乃ち從道台湾を討て之を服し、満身の名譽と共に勇ましく凱歌を奏しつゝ凱旋し、東京に入るや先づ兄隆盛を訪ふ、其の意蓋し阿兄若し問ふに戦況を以てせば、從道語るに、煙瘴霧の委曲、其の戦

功の談を以てせん、と心竊かに之を期す、既にして兄弟の座席定まりて相對するや、意外にも隆盛庭前の愛犬を指し顧みて曰く「ドゥ能く太ッたらう」と亦終に一語の征台の事に及ぶものあり、是に於て從道も豫期に反し征台の戦功談、一言を發せせして歸へれりといふ、蓋し南洲の氣宇已に宇宙を吞吐し、豪氣肛を吹く、其の深く心に期する所は、滿清曠厚の併呑、更らに進んで西伯利の席卷にあり、何を區々たる彈丸黒子の台湾、其の眼中にあらんや、是れ其の弟從道に對し征臺の事を問はざる所以、意外にも愛犬の太ッたるを話せる所以あり、嚙々是れ南洲の南洲たる所以のもの蓋し想ふに其

の愛犬といふは、他日上野山王臺、南洲銅像の傍らに安置せる獵犬即ち是れならん即、犬も亦榮と云ふべし。

○南洲の頓才

明治元年五月、上野の戦ひ、正面黒門口の官軍は、實に篠原國幹之れが將たり、即ち國幹、衣は胛に至り袖は腕に至る、鹿兒島健兒を率ゐ、自ら勇を奮ひて突進す、隆盛後方にありて全軍を指揮し、遙かに篠原突進の状を見て、終いに危うからんことを恐れ、其の攻戦の進路を轉せへき旨を合めて使者を遣はす、國幹憤然として曰く、「西郷先生何ぞ此の言と爲すや、或は我れを以て此の方面の任に當らずとせるか、我れは

即ち我が方面を攻む、好し假令最大の苦戦難所ありと雖ども何ぞ亦他に譲らんや、」と益々奮進突撃す、隆盛之を聞きアタラ^多猛士を殺すも惜むべし、其れ將た篠原の一人戦死せども、敵軍^多彰義隊の征滅に事を欠くにあらざ、勝敗の全局は己に定まる所、而して此のまゝにして放棄せんには、國幹終に戦死せん、乞ふ我れに一策あり、と弟從道を遣はし、復た之れに言はしめて曰く、「ア、其れ篠原氏よ他に尙ほ一層苦戦の難所あり、足下之れに當るの意なきや否や、」と去らぬだに猛氣已に天を衝くの篠原、他に尙ほ一層の苦戦の難所ありと聞いては、最早黙をへきにあらざ、我れ乞ふ之れに當らん、

と其の率うる兵を擧げて退き、隆盛の前に出で、其の所謂最大の難所に向はんことを乞ふ、而かも固より黒門口より外別に所謂難所なるものあるにあらざ、既にして官軍の別隊、根津谷中の方面より彰義隊の背後を衝き、前後合撃、遂に幕軍大潰、官軍大捷を擧ぐ、然れども黒門口に向ひしものは、官軍も亦少からざる戦死を見る、而して篠原は、是れより先き退けるを以て、遂に其の身全さを得たり、是れ主として隆盛一時の頓才を以て、篠原の命を拾へるものなり、去れば後ち明治十年、西南の役、篠原は西郷の爲め、奮戦突撃、主として第一の戦死を遂ぐ、然れども顧みて上野の役、隆盛一言

の爲め、確かに篠原十年の命を延せり、英雄の頓才、其の影響亦大いなりと云ふべし。

○吉之助弟吉次郎に兄事す

西郷隆盛、幼名を吉之助と云ふ、而して其の次弟を吉次郎と稱し、其の文武の學、都て皆を兄吉之助と凌駕と、是に於て乎、吉之助一日禮を正うして、弟吉次郎に謂て曰く、「夫れ弟の兄を敬とるは、徒らに其の年の長じたるの故にあらず、即ち學識深く、世故に老けたるを以てあり、然るに今夫れ予の學識世故は、却て卿に及ばず、是れ卿は予に愛憐を加へ教ふべきものにして、予は却て其の愛護を受くべきものあり、故

に予は今より卿に兄事せん、予が年長の故を以て、決して予に遠慮すること勿れ、」と兄吉之助は、逆にも爾來弟吉次郎を見るふと兄の如しといふ、噲々吉之助の質直飾らざる、亦稱すべし。

鬼雄外史曰く、余輩之を羅馬のセネカに聞く、「人の年齢は敢て其鳥兔星霜の長短を以て數へず、即ち當さに其の人の成せし事業の大小多寡を以て之を數ふべし、」と今夫れ兄西郷吉之助の、弟吉次郎に兄事ある、殆んどセネカの語に従ふものに似たり。

○南洲一時の君子と爲る

西郷南洲、曾て征韓論の議合はず、決然冠を掛けて勇退せりや、飄然として故山に歸る、一日愛犬を従ひて獵獸に出づ、既にして歸途或る民家に立寄り、姑らく休息の後ち、農夫が響應に沸かす湯に入浴し、其の体頗ぶる爽快を覺ゆるの上にて、更らに農夫が誠心に酌み取る茶を飲み、喫一喫、心中清涼亦云はん方なく、傍人を顧みて曰く、「世に所謂君子の心なるものは、二六時中、常に此の心を持つるものあらん、噲々予も亦今は一時の君子と爲れり、」と満面の笑みに之を云はれたりといふ、蓋し上野山王臺の銅像は、或は其の前後の獵態を鑄るものあらん耶。

◎大村益次郎

○奇異ある自問自答

大村益次郎、其の先の名は、村田藏六と云ふ、實に是れ長藩の名士あり、寧ろ其の名將なり、但し藏六の兵を率ゐて、戰場に臨むや、敵軍前面に現はるれば、忽ち泰西流紀律嚴肅の陣を布き、歩武齋々堂々として軍を進め、其三寸腦中の韜略を顯はして、猛撃蹂躪す、既にして敵軍遠く遁走して、其の影を認めざるや、其の野營は、忽ち變じて一種の兵學校と爲り、以て兵書講義の聲を聞くに至れり、即ち藏六其の身は、一は以て軍隊を指揮するの將師たり、又一は以て兵學校の校師た

り、去れば其の部下の衆は、一は以て兵隊たり、又一は以て兵學校の生徒たり、實に世間類例なき、奇異なる軍隊組織と云ふべし。

藏六曾て伏見の陣營にあるや、姑らく戰鬪の閑を告ぐ、是に於て乎、例に由りて兵率たり、且つ生徒たる衆を集めて、經吳及び泰西ナポレオン流の兵書を講ず、然るに其の近隣に酒樓あり、三絃歌舞の聲、常に講席に達し、且つ其の生徒の屢々登樓して、欠席をるものあり、藏六甚だ之を喜ばず、一夜開講して、生徒を集む、三絃笛鼓の聲、例に由りて攀々として聞ゆ、藏六突然衆生を顧みて曰く、「ア、彼れは何の聲ぞや

と衆或は三絃の音なり、將た笛鼓の聲なり、或は歌舞の動搖あり、と各々其の聞く所を以て答ふ、藏六乃ち皆な之を排して曰く、「否な彼れは三絃の音にあらざ、笛鼓の聲にあらざ、將た歌舞の動搖にあらざ、彼れは即ち金錢の逝去るの聲ありと意外の諷言、衆愕然として喫驚し、既にして翻然として悟り、是れより登樓するもの其の跡を斷ち復た開講、其の欠席と見ざるに至れりといふ、亦奇異なる諷刺と云ふべし。

○兩雄沈黙の會合

明治維新の始め、群雄中原虎を攫むの手を翻し、笑て花園に良枝を求むるや、當時の英雄を論ぜるもの、必らず先づ指を

薩の西郷吉之助、長の大村益次郎に屈せざるはなく、兩雄の一舉手一投足の細と雖ども、大いに人目を引き、都鄙至る處之を喧傳し、以て好談柄と爲るに至る、兵亂既に平定するの^後、西郷は故山に歸り、大村獨り朝に在りて、専ら文武の政務を司り、兩雄相見ざること、茲に半歳、既にして明治二年に至り、西郷始めて東上し、西の丸政堂に於て、大村と會し、時の官吏皆を以爲へらく、兩雄久濶にて相會す、其の談論舉措、必らず人の視聽を驚かし、人意の表に出づるものあらん、と障子の外にありて、窺かに之を窺ふに、時に西郷は桂に倚り、頻りに羽織の紐を弄して餘念なく、又大村は默然

四周を眺むるのみ、時を刻すも、互ひに一語を交へせ、暮色蒼然たるに及んで、兩雄喜色滿面に溢れ、互ひに目禮して相別る、是に於て障外に立てる某官人、此の光景を見、傍人を顧みて曰く、「ア、天下名優ダンマリノ幕は、亦格別のものありと歎息良久うして去る。

鬼雄外史曰く、按ざるに海外に此の例を求むるに、一千八百三十三年、米國の大思想家エマーソンが、英國の大批評家ヤールイルを、其の寓居クレイゲンバトックに訪ふや、カールイルは先づエマーソンに巻煙草を興へ、自ら又之を燻いらしうし、兩碩儒黙坐して深夜に及ぶ、而して兩人は

互ひに無上の快樂、今宵に過ぐるものあり、と握手して別れたりといふ、蓋し非凡人傑の會合は、甲の言はんと欲することは、乙既に之を知り、又乙の語らんと欲することは、甲亦之を識る、故に互ひに開口せず、無言沈黙の間、千言万語に優るの快談を爲すに均し、是れ其の西郷大村兩雄久濶の會合、無言沈黙ダンマリノ幕を演ずる所以あり。

◎熊澤蕃山

○主客の精比べ

世に漢儒者と云へば、動もすれば章を摘み令を釋ね、已に史上一片の烟りと爲たる、徽菌的三千年太古の仁義説を率ゐ來

り、其のまゝ今日の活社會に行はんとせむ、柄鑿者流其の常あるに、茲に万縁中の紅一點、異采經世の活學者熊澤蕃山は、元と是れ京師の人あり、其年尙は若き頃、近江聖人と云はれたる、中江藤樹其人の碩學徳行を慕ひ、遙るく笈を負ふて近江に至り、藤樹に面會して、其の學業を受けんよとを請ふ然るに藤樹の謙遊なる、之を辞とるに人の師と爲るに足らざるを以てし、亦容易に肯がはず、而かも蕃山の誠心は一徹に尙ほ頤りに請ふて止ませ、是に於て藤樹は之を五月蠅しとや思ひけん、將た又辞するに言ふく、狀勢已むを得ざるとや想ひけん、藤樹乃ち戸を閉ぢて入れせ、而かも蕃山は頑として

根より生じたる磐石の如く、敢て去らせ、其の廉下に宿ること二晝夜、藤樹の母、傍らに此の体を見て、深くも其の篤志に感じ、藤樹に謂て曰く、「嘻々彼の人の懇請此の如し、汝の學びし所を以て之れに傳ふ、誰れか亦好んで人の師と爲りしと云ふものあらんや、彼の人の懇請を察せむも亦可あり」と藤樹是に於て成程と感じ、始めて蕃山の請ひを許し、茲に師弟の約成り、蕃山學業を受くること數年、遂に硬骨經世の鴻儒と爲れり、蕃山の成業も亦宜かる哉

○才敏流がるゝが如し

熊澤蕃山の才敏は恰も流がるゝ如く、曾て幕府の執政松平信

綱、其の智餘りて溢るゝ如く、時人稱して智恵伊豆と云ふ、卒然蕃山に問ふて曰く、「人其れ君命を帯びて他に使す、途上偶まゝ親の讐敵に邂逅を、此際若し君命を大切として使命を先きにすれば、親の讐を脱す、若し又好機會として、親の讐を討んことを先きにすれば、君命を疎略にするに似たり、果して孰れをか先きにすべきや、之を處するの道如何、」と蕃山其の聲に應じ、直ちに對へて曰く、「親の讐ある者は、敢へて君に事へざるは禮あり、故に君に事ふにや親の讐已になし是れ以て御疑問の如き境遇に際し、躊躇あるべき筈なし、と流石の智恵伊豆も、深く其の答へに感じ、大いに悦ばれたり

といふ、其の才敏の流がるゝ、亦驚くべきものあり。

○上下和順の要

熊澤蕃山學成るの後ち、備前侯の招聘に應じて、師傅兼顧問と爲り、又之れが執政と爲る、蕃山曾て君侯の召に應じて君前に至れば、則ち侯問ふに政治の要を以てす、蕃山謹み對へて曰く、「太平の道は、其の規一からき、然れども之を約するに、上下心を一にし、君臣其の躰を同うするにあり、」侯曰く然らば之を爲す果して如何、蕃山曰く、「他なし一の奇の字にあるのみ、」と侯之を聞き、沈思點想良久して遂に其の理由を得せ、是に於て蕃山乃ち其の解説を述べて曰く、「侯其れ

奇の字の分解を知らざるや、今茲に彼の奇の字の形畫を按ゆ
 るに、上をして立たしめんと欲すれば、下可ならぬ、去れば
 とて下をして可ならしめんと欲すれば、上立たぬ、故に上と
 下と相和して、茲に始めて完全なる奇の字と爲り、上下乱離
 の憂ひあかるべし、と候之を聞き、大いに其の機敏なるを歎
 賞せりとぞ、世に此の奇の字の分析配合を以て、學童の智遊
 と爲すことありと雖ども、而かも其の厚と蕃山の思慮に出で
 たるを知らざるもの多し、故に今茲に輯録改修して、讀者博
 聞の資に供すること爾り。

◎新井白石

○白石記録の精勵

古來有名なる學者は、何れも皆な其の見聞したる所を記録し
 たるものにて、東坡の如きも、「白髮尙は書を抄す」と云はれ
 たることあるが、茲に新井白石は、平素其の記憶力の強さ、
 實に驚くに堪へたるものあり、然れども白石は敢て自ら天稟
 の記性を頼まぜ、能くも深く注意して、一々之を記録し、他
 日の遺忘に備ふること、亦普通常人の及ぶ所に非らぬ、嘗て
 三五の知人訪ふ、談話益々佳境に入り、半日の長談、客漸く
 將に去らんとするに臨み、白石衆客に謂て曰く、「嗚呼諸君
 は何等の強記をや、予は極めて諸君の記憶力強きに感ず」と

客怪みて曰く、「先生何んぞ此の言を爲そや、我等殆んど之を解せせ、」白石曰く、「左れば餘の儀にもあらせ、今日の談話、半日の長談とて、種々有益の談説、或は面白き説話等も之れありたれば、予は後日の遺忘に備へんが爲め、其の要所、或は佳所は、皆之を紙片に認めたるに、最前より見れば、諸君は一に皆之を記憶に委ねて、把筆せらるゝを見せ、是れ予が其の強記憶に驚く所以なり、其れ將た此等半日の談説、一も採るべき所なしとせるによるか、左りとは亦其の高見に驚かせんばあらせ、突角諸君の學識強記、予の及ぶ所に非らせ、」と衆客皆な赧然慚愧し、亦一言の辞なく、狐鼠々に立

ち去れりといふ、亦痛快の諷刺と云ふべし、

○外客に接するの要

内國人と内國人と相接するは、敢て策略的の心痛あるをかしと雖ども、而かも外客と接するには、大に注意すべきことあり、敢て外人を瞞着せよと云ふにあらせ、即ち誠實の間に於て、大に心を用ゐざるべからざることあり、正徳の頃、朝鮮遣使渡來の時白石乃ち其の接對の命を蒙る、韓人白石に其の俸祿を問ふ、白石答へて曰く、「なれば幕府我れを養ふ何千何百口ありと、蓋し外人に對し、本知二百石と云はんも、餘りに少數にて快からせ、且つ聊か國辱にもよればとて、唐風に人別

にて、何口とは答へたるあり、然らば忽ち口頭の上る何千の
數は、己れの貫目を墜さめ工夫、一時の頓才、答へ得て妙の
又妙と云ふべし。

○從客君子の態度

元祿六年徳川家宣、甲府藩邸にあり、時に新井白石召されて
其の儒官と爲り、以て常に進講至らざるなし、既にして寶永
元年、家宣立て將軍の儲副と爲り、以て將さに江戸西城に入
らんとす、乃ち白石、間部詮房に由て謂て曰く、「凡そ天下の
事、臣曾て皆な進講せり、今亦何をか云はん、請ふ忘るゝこ
とあくんば幸甚、」と後ち家宣詮房に謂て曰く、「白石の一言、

予敢へて一日も忘れざ、」と居ること幾くもあく、西城に召さ
れて侍講と爲ること、藩邸の時の如し、嗚呼其れ世間普通の
凡儒にありては、其の君青雲を得て龍驤すると聞かば、急に
縷々の言を以て送るを常態とすべきに、白石は此等急驟の体
なく、彼れが如く從客の態度、實に是れ君子の風と云ふべし

◎物 徠 徠

○臭氣群蠅を集む

東都下谷に萬年山祝言寺と云ふ寺院があり、是れ有名なる物
徠徠知縁の寺あり、茲に徠徠の邸に、年久しく使へる老婆あ
り、折節は祝言寺に行きて、彼の寺の様子をも知りたり、一

日主翁徂徠に向て云ふやう、「先生よ、祝言寺の御談義は、参詣の者頗ぶる多きに、何故か此方の會識日には、來る者甚だ少きことあり、」と徂徠翁之を聞き、微笑して曰く、「去ればホウく其れよ、彼の臭き物には、兎角蠅の集るものあり」然るに臭氣なき新鮮の物には、蠅の來ること甚だ少きものあり、何ぞ亦怪むに足らんや、」と亦趣味ある言と云ふべし。

○徂徠の一大嗜好

或人徂徠に問ふて曰く、「先生講學の外、何をか好み玉ふや、徂徠莞爾として答へて曰く、「予敢へて他の嗜好あるなし、只だ炒豆を噛んで、宇宙間の人物を罵倒せ、是れ予が講學外、

第一の嗜好なり、」と噫其の猛氣宇宙を吞吐し、六合を掌弄するの概あり、苟も其れ學者たり、宜しく此の氣概をかかへらざるなり。

○一言二百石の加祿

是れは徂徠の智慧にあらざして、其の夫人の智慧あるが、孰れ同一家人の智慧、徂徠之れが爲めに有福の身と爲られたるなれば、勢ひ之を談せざるを得ず、茲に徂徠は、郡山の柳澤家より二百石を賜はり、時々講談を申上るゆゑ、柳澤侯にも折節徂徠の許に來らるゝことあり、一日柳澤侯、徂徠の家に立寄らるゝに、徂徠が妻女、御前へ出でられなければ、侯に

は聊か世話として曰く、「ア、徂徠にも、定めて家政不自由ならん」と徂徠の夫人は、取り敢へて對へて曰く、「否か、左様には候はせ、豫て殿より四百石を頂戴仕り居り候得ば、決して不自由等のことは之れをし」と柳澤侯には、流石は二百石なりとも云はれせ、苦笑一番、「左様にてあるか」と申され既にして歸邸せられたるが、其の年よりは、舊に倍して、四百石づゝを賜はるに至れりぞぞ、妻女一言の頓才、二百石を増す、亦徂徠の配たるに背かせと云ふべし

◎山崎闇齋

○意外の疑問

山崎闇齋は、尋常儒學の派とは、一種其の學風を異にしたるものあり、闇齋會て群弟子を集め、卒然奇問を發して曰く、「方今の世、若しも支那に於て、孔子を以て大將と爲し、孟子を以て副將と爲し、數十万の大軍を率ゐ來りて、我邦を攻むることあらば吾党孔孟の道を學ぶ者は、此の際進退を決すること果して如何、若し孔孟の軍に投じて自國を攻めば、國を愛せざるに似たり、去ればとて國家の爲め、兵器を執りて、孔孟に抗敵せば、日常學ぶ所に背くに似たり、死んぞ進退維れ谷る所、果して如何に處せんとするか」と弟子皆々意外の疑問に、愕然として喫驚し、對ふる能はずして曰く、「小子等

爲す所を知らず、願くは先生の説を聞かん、「闇齋是に於て、自ら之れが答案を附して曰く、「諸子敢へて躊躇すること勿れ不幸にして若しも此の危難に逢ふことあらば、則ち吾党は身に堅甲を被り、手に銃槍を執りて、彼れと快戦し、孔孟を擒にして、以て國恩に報ぜん、是れ即ち孔孟の道なり、」と弟子皆を大に感服の体にて、殆んど酔へるが如く之を聞けり、斯くて其後ち闇齋の弟子、伊藤東涯を見、告ぐるに此の言を以てし、且つ誇りて曰く、「噫々吾が闇齋先生の如き、深く聖人の奥旨に通ずるものと云ふべし、若し夫れ然らざれば、安んぞ能く此の深義を明かして之れが變に處するの説を爲すを

得しや、「東涯微笑して曰く、「子幸ひに孔孟の來りて、我邦を攻むるを以て念と爲す勿れ、予決して其の之れなきを保證すと闇齋の弟子默然答ふる所あり。」

◎頼 山 陽

○學者の軍略

凡て社會の事、他術の應用に由りて、大利を得るものあり、頼山陽賞て友人の家を飯む、酒間謂て曰く、「我れ昨夜近街の花市を冷かし見るに、寒蘭の一盆あり、如何にも我が心に適ひ、心中必ら之を得んことを期す、而かも我が意中を悟らるれば、先づ價格は、其の面相に由りて定る、是れ我が恐る

所なり、是に於て乎、予は其の意中を韜晦し、先づ故意に他の零碎ある我が豫期外の物を指して、個々に其の價格を問ひ、然る後ち漸く蘭に及ぶ、彼れ果して我が術中に落ち、廉價を以て答ふ、我れ是れ以て得たり賢しと、更らに又下段の値を付けて、遂に意外ある安廉の寒圃を購ふ、而かも大に我が意を得たるものあり、是れ所謂明らかに機道を攻むるの狀を爲して、暗に陳倉を度ぬる軍法を應用したるものなり、豈に亦妙策にあらずや、と大いに笑て、更らに一大白を擧げたりといふ、實に汕斷の爲らぬ學者なり、然れども史學の應用は、茲に至らざるを得ず。

○碩儒は本箱に非ず

或人山陽に向ひ、種々古文古詩等の字義に就き、之れが解釋を求め、更らに日常山陽が使用せし古文辞の中、如何はしき所を難詰せしに、山陽は默然として不佛の如く、敢へて答へず、某更らに漢上禮樂の變遷に就き質疑する所ありしに、山陽又默然答へず、某得意の鼻をヒコ付かせ、更らに又口を開かんとするに當り、山陽大の眼を怒らし、大喝一聲、之を叱して曰く、「我れは是れ本箱にあらず、若し本箱が欲しくんば去りて指物屋と本屋に往け、」と某大いに慚愧して去れりといふ、蓋し山陽は、今日の活社會の爲めに、餘り必要なき禮樂

の變遷や、將た又餘り必要なき、古文辞牽強治會の解釋の爲めに、其終生の光陰を犠牲に供せんとするものにあらず、即ち當世活社會に應ずる、活學の爲めに精力を尽すもの、何ぞ世上一般の腐儒者流と共に、活本箱や、活字引を以て目とべけんや、然るを某は是れを之れ知らせして、彼れが如き疑問を提出と、是れ山陽の默然答へせ、遂に一喝激怒する所以あり。

○富嶽の壁噺

畫家柴田是真嘗て上國に上り、山陽の門に遊ぶ、而かも當時山陽の名、未だ東方に聞えせ、因て是真も亦之を凡儒視し、

敢へて之を尊重せせ、山陽亦之を知る、而かも學海に於て、已に豪氣肛を吹ける山陽は、是真が己れを凡儒視するを辱しとせせ、一日是真を招いて曰く、「汝其れ富嶽を知るか、夫れ富嶽に居る者は、自ら其の高さを知らせ、又日月の恩、殊に尊さを覺えざるは人情あり、汝我門に遊んで、予の異采、其の非凡あるを知らざるも、他日多く年月を経て、遠く之を聞かば、山陽の名高きことは、必らず富嶽と均しきことを知らん、ア、高名ある我門に遊ぶ汝は、他日亦其の影響として餘榮あらん」と其の言傲慢に似て、是真甚だ之を喜ばせ、然れども其の年月を経るに従て、山陽の雷名、果して其の言の如

く、是真亦曾て一たび其の門下に遊びし關係ありしを以て、大いに利する所ありしといふ。

鬼雄外史曰く、今夫れ此の逸話を以て、彼の徂徠が、妙豆を噛んで、宇宙間の人物を罵倒す、是れ我が大嗜好ありと云へるの談に比すれば、均しく是れ傲慢と雖ども、大いに異なるものあり、蓋し徂徠の傲慢は憎く氣のなき、愛らしき傲慢なりと雖ども、山陽の傲慢は、傍ら人なきが如く、少しく悪く氣のある傲慢あり、想ふに是真も彼れが如き一見識あるものなれば、其の初め随分山陽師を、餘外々々しくも凡儒視したりと見えたり、去ればこそ山陽も、幾分の

激情を以て、彼れが如き傲慢の言辞をも爲したるものと見えたり、然らば敢へて深く答むるを要せざるものあるに似たり、但し我か爲めに、汝も亦餘榮あらんどの傲慢、他に之れが類例を求むるに、英の文豪カーライル、曾て一知友と共に、公園を散策するに、偶々／＼一陣の猛風颯然來りてカーライルの帽子を吹き落す、傍人捨て之をカーライルに與ふ、既にしてカーライルは、往く／＼知友に語りて曰く、「ア、彼れも幸ひふり、何とあれば彼れは是れ英國第一流の文豪、カーライルの帽子を拾ひ與へた、と人に言はるゝの光榮を得べし、」と嗚呼何ぞ傲慢の太甚しきや、山陽の

傲慢も、亦三舎を避くるものあり、嗚呼亦驚くべき哉。

◎大久保利通

○意外の一唾敵を斃す

幕末天下騒然たり、當時薩の大久保利通、其名を市藏と云ふ京攝の間を往來す、市藏一日、同藩の士、有馬某と共に、京都二條通りの市中を散歩するに、偶まゝ彼方より、他藩の士三人、打ち連れて、此方を指して來りけるが、彼れ殊更らにも、市藏の傍らに近く歩み寄り、摺り違ひながら太刀鞘を觸れしめ、難題を言掛けて、即時に決闘せんことを迫る、嗚呼鹿兒島男兒、此の場合に臨みて、何ぞ亦躊躇すべき、速か

に之れに應ず、此の時市藏の連れ有馬某は、市藏に後るゝよと凡ろ一町、遙かに此の体を見て、援け鬪はんと欲し、急足馳せ來るに、彼の三人の者は、早や己に刀を抜き連れて、市藏に向ふ、其の勢ひ殆んど間髪を容れず、時に機智ある市藏は、一步退くよと見えけるが、忽ち真先きに進み來る一士の面に向て一唾す、彼れは思はず袖を以て、其の面を拭ふに、市藏隙を飛び込んで、一聲叫びて、只だ一刀に之を斬り斃す、彼れ他の二人の敵手は、此の氣勢にや恐れけん、早くも其の場を逃げ失せたり、市藏は、徐ろに血刀を拭ひて鞘に收め、復た敢へて追躡せざ、噫々時に取りての一唾、亦偉大の

成功と云ふべし

鬼雄外史曰く、余輩曾て之をナポレオン第一世に聞く、「戦争は將さに戦はんとする瞬時、一事の以て、大いに敵軍の耳目を驚惶せしめんよとを要す、」と市藏當時、未だ敢へて必らずしも此の兵語を見しものにあらざ、然り而して能く此の兵略に適へる、一唾以て敵人の氣を奪へるは、亦機敏の動作と云ふべし。

○沈勇の圍碁

大久保利通の沈勇なる、今敢へて喋々せざ、實に利通の喜怒は、常に面皮幾重の下に隠れ、亦容易に其の辞色の間に現は

れど、曾て明治の初年、征韓論の起るや、政府二派に分れ、激論敷刻、口泡飛散、恰かも修羅場の如し、而して利通は、非戦論を主張するものにして、其の舌鋒を收めて、自邸に歸るや、從容更らに平日に異ならず、客と碁を圍み、鶯鳥の戦ひ方さに耐いありし頃、人あり來り報じて曰く、「板垣氏辞表を出す、」と利通神色自若として曰く、「ア、然る乎、」と又一子を下す、既にして又江藤氏辞職の報あり、利通曰く、「然る乎」と更らに又一子を下す、尋いで副島諸氏辞職の報あり、利通尙ほ依然として又一子を下す、是れ皆を主戦論者にして、彼輩袖を連ねて、陸續辞表を呈とるあり、此時倏ちにして戶外

足音の蹙然たるを聞く、即ち其の戸俄かに開き、人遽かに入り、急調の音聲に報じて曰く、「西郷さん亦辞表を呈と。」と流石沈重の利通も、此の一報を聞くや、一聲大いに叫んで曰く「ア、果して然る乎、」と右手を上ぐるゝ一尺有余、思はせ落と基石は、憂然として盤面皆を響けりといふ、當時利通が、如何に西郷隆盛に重きを置けるかい、此の一話を以ても知らるべし、若し夫れ板垣、江藤、副島諸氏に至りては、沈勇ある利通の眼中になく、蓋し其の手に攫む、基石ほども思はざりしかり、然り而して獨り南洲に重きを置けるや此の如し抄當時實に征韓主戦論の主領は、西郷南洲にして、非戦論の首

魁は、大久保甲東かりしかり、去れば後ち明治十年、西南の役は、人之を評して、「大久保西郷二人の喧嘩あり、」と云ふ、蓋し適評あり。

○外交談判の一大秘訣

時維れ明治七年、我邦師を臺灣に出すや、我が政府は、大久保利通をして清國に談判せしむ、大久保乃ち琉球は、我邦の版圖なりとの証據を列記したる書面を懐中し、天津に於て、李鴻章と會見す、時に大久保曰く、「琉球は我が版圖なり、」と李鴻章も亦曰く、「琉球は清國の屬國あり、」と互ひに我見を主張して相譲らざ、只だ此の一語を接せしのみにて、辞色莊勵

殺氣面に溢る、李鴻章も亦然り、此の如くにしては清兩國の委員、最早他に繼ぐべきの詞なく、最後の一語、開戦を演ぶるより外なき場合とありしかば、大久保は忽ち懐中の書を出さんと、時に顧問として、大久保に附添へ來りしポアソナードは、傍らにありて此の体を見、這は一大事なりと思ひ、身を大久保の近くに進め、手を以て窈かに利通の般を捻る、利通は不意に般を捻られ、是れ必ら其の所以あることあらん、と其日は茲に談判を中止して旅館に歸る。

既に旅館に歸るや、ポアソナードは大久保に向ひ、長嘆大息して曰く、「嗚呼日本一國の休戚榮辱、公の一言に係る、何ぞ

其れ思はざるの甚だしきや、夫れ兩國の大臣、樽俎の間に相見る、宜しく從客事理のある所を談判すべし、然るに李鴻章怒り、公亦怒る、公何ぞ自重せざるや、公急速にも懐中の書を出さんとす、危険焉れより甚だしきはあし、試みに思へ、公先づ懐中の書を出さば、我れは是れ忽ち其の舉証の位置に落つるに非らずや、我れにして一旦舉証の位置に落つれば、彼れ我れを論難攻撃すること、百方向は止まざるべし、彼れ李鴻章、先きに琉球は、清國の屬國かりと云ひし時、直ちに其の辭氣に進んで、然らば何故に然かく云ふか、乞ふ其の証據を示せと云はざるや、此の如くにして我れ先づ問を發せば

彼れは忽ちに位置を變じて、其の舉證の責任を負はん、彼れ勢ひ已むを得ずして証を擧ぐれば、其の舉證に對し、我々一々之を攻撃し、彼れが舉證已に尽くるを待ちて心中竊かに我が證據と比較し、其の不利ある所のものは、皆な之を棄て、其の全勝を得べき、最も正確なるもののみ、誰かに一二を示さば、彼れ語塞り、遂に我が要求を容れんこと必せり、要するに彼れをして先づ舉證の責任を負はしむるにより、即ち其の終局の勝敗は、多くは是れ先きに問を發せると否とに由りて決まるあり、若し李鴻章の先きんずる所とならば、公其れ二國の榮辱を如何せん、公其れ之を思へ、」と流石の大久保も

恰も酔へるが如く之を聽き、深くも成程と感じ、次回の談判に、機を見て先づ問を發し、忽ち彼れをして舉證の位置に落とし、連難連詰、遂に我が談判の勝利に歸し、因て以て彼れより、五十万「テール」の償金を得て、爾來琉球には、沖繩縣を置き、我が版圖たること、磐石の基礎を据え、外人亦指すものなきに至れり、是れ主としてポアンナード注意の効果をりといふ、而かも其の談判の衝に當れるは大久保あり、利通の辨功も亦偉大なる哉。

◎木 戸 孝 允

○英雄の氣概

長藩の英雄木戸孝允、初め其の名を桂小五郎と云ふ、其の尙
は一寒生たる頃、徒然に耐へて、滑閑の爲め、少壯の同輩と
共に、音曲淨瑠璃の稽古に行へば、元來慧敏なる孝允は、忽
ちにして其の歌枝上達し、最早同輩の比にあらず、音曲師某
之を見て、一日孝允に謂て曰く、「ア、子の咽喉は、實に素生
の好い咽喉あり、今一息で本職に爲らるべし、乞ふ怠るこ
と勿れ、」と孝允は退ひて、獨り自ら慨然として曰く、「ア、大
丈夫豈に其れ區々たる小技を以て、生計を爲すべけんや、抑
もく初め我れの音曲を學べる所以のものは、只だ其の無職
消閑の具となさんと欲せしのみ、然るに不思議に案外にも上

達して、今や漸く將さに一步にて、本職の域に至らんとす、
嗚呼危い哉、此のまゝにして悟らずんば、遂に我が本志を破
らん、若かず斷然之を廢せんには、」と即日音曲の稽古を廢し
て、終生復た再び音曲を弄せざといふ、英雄の氣象亦感ぜべ
し。

◎横 井 小 楠

○機智頓才の早變り

徳川覇政の末路、天下海内の志士、皆を翕然攘夷鎖國論を唱
道す、其の勢ひ猛然殆んど當るべからざるものあり、此時に
當り、群衆の見を排し、率先開國論を唱ふるもの、東國にあ

りては、佐久間象山、西國にありては、横井小楠即ち是れなり、小楠其の本名を平四郎といふ、曾て亦師にありて、開國論を唱ふるや、土佐藩士某、日頃攘夷論を主張するの餘焰、遂に之を刺んと欲し、往いて之を訪ふ、至れば則ち平四郎は胸中に城廓を設くることかく、諄々として宇内の大勢を説き其の開國の方已むべからざるを示す、去れば某は之を聞いて遂に屈服し、心中其の之を殺さんとしたることの非あるを悟り、尙ほ其の教導を請はんとて、終に平四郎の寓所に宿せり、嗚々人其れ是非を辨別し、良心に立ち返るや、茲に至りて、其の心已に神の通せるものと云ふべし、茲に又彼の土佐藩士

某の友人等は、右の趣きを傳聞し、大いに其の變心を憤り、平四郎共々に之を斬殺せん、と五人打ち連れて、平四郎の寓所に至り、先づ名刺を通じて、某に面せんと、乞ふ平四郎は其の機を見て、急に坐を外し、其の着せし羽織を裏反しにかし、傍はらに膝を屈めて、且那は此方にとて、其の坐に案内しければ、五人の者は去らばとてドヤ／＼と上り來るを見て某は、イヤ是れは／＼と話し掛くるをも待たせ、先立ちし一人、有無の挨拶もなく、忽ち一刀引き抜き、眞向鬪して、某の頭を目掛けて、バラリズンと斬り下ぐること二三寸、流血淋漓として、滿面に流下し、眩迷して殆んど見る能はざるも

而かも尙ほ屈せ老、オノレと言ひさま、傍はらにある一刀を執りて、抜き打ちに之を斬り斃せり、彼れ他の四人の者は、此の体を見て辟易し、急遽早惶逃げ出す、某は彼れ其の囂然聲あるを聞き、「横井君手應へはありしか、様子は如何に、」と呼ぶに、平四郎は急に馳せ寄りて前に座し、扇面颯と押し開き、大聲に、「天晴お美事、充分な手應あり、」と稱賛せれば、某は是れにや氣弛ひけん之を聞くど均しく、其のまゝ其處に例れたり、嗟乎平四郎の危機一髪、頓才を以て免れたるは、亦敬服の至りあり。

◎北條安房守

○消極的裏面の計算

寛永の頃、甲州流軍學士、小幡勘兵衛の門下に、北條新藏なるものあり、出藍の軍學士にて、自ら一機軸を出して、廣く門弟を薰陶す、之を稱して北條流の軍學と云ふ、後ち立身して安房守に任ぜ、是れ有名ある大石内藏助軍學の師たる、山鹿素行の師あり、曾て徳川三代將軍家光、板橋近傍にて鹿狩を爲す、抑もく徳川二三代頃の板橋は、明治今日の板橋と異なり、尙ほ武藏野の原の舊形幾分を存したる頃にて、鹿なごの徘徊するは其の常あり、扱てある鹿狩を催せられたる所以にて、時恰かも夕景、暮色蒼然たる頃、家光は安房守を、

御前近く招いて曰く、「汝部下の組を率めて、幾頭の鹿を獲たるや、能く數へて來るべし、」と安房守は、委細領承して罷り出られけるが、生憎や此時日己に暮れたり、且つ獲たる鹿數は多し、若し尋常一般の方法を以て之を數へんには、或は數へ漏れもあるべく、將た又一物を再び數ひ入るゝの恐れもあり、旁々以て容易の業にあらざ、然れども己に軍學の奥義に通せるもの、忽ち案じ出したるは、懐中の鼻紙、之を幾折りにか切り、全數幾つと記憶し、扱て部下の士を召して曰く、「汝等此の切りし紙を持ち行いて、一々鹿の耳に結び付け來るべし、但し將軍家へ言上する計算用のものにもあれば、決し

て二ツ付くる等の過ちなく、必らず一頭一紙ツ、と結び來るべし、」と安房部下の士、皆を唯々として諾し、右の切り紙を持ちて、八方に馳せ、既に獲たる鹿の耳へ、一々此の片紙を結び付け來る、而して安房守其の切り紙を數ふれば、若干あり、是に於て乎、先きに記憶せる切り紙の總數より之を減ずれば、即ち幾許と算出せらる、是れ即ち其の獲鹿の全數あり是を以て將軍家へ言上すれば、家光も其の算法を聞いて、大いに其の機敏あるを稱賛せりといふ、表面より數へせ、裏面より算す、之を消極的の計算とは云ふなり、安房守の如き、一時の頓才、算し得て妙の又妙と云ふべし。

◎山鹿素行

○山鹿數十の分身

先師北條安房守は、軍學を小幡勘兵衛に學んで、出藍の譽れより、然るに山鹿素行、又軍學を北條安房守に學んで、出藍の名譽あり、即ち山鹿の軍學、之を名づけて山鹿流の軍學と云ふ、曾て江戸に帷を下して、軍學を指南す、諸侯伯之れに就いて學ぶもの少ふしとせき、即ち播州赤穂城主淺野侯の如き其の一人なり、此時に當りて、諸侯の之を聘せんとするもの多く、殊に紀州侯の如き、大諸侯の之を聘するものあるも之れに應せず、己にして淺野侯之を聘す、素行之れに應じて

赤穂に至る、人皆之を聞いて異數とと、其道中送迎の盛んなる、儼然大諸侯の如し、斯くて赤穂にありて、子弟を薰陶する十年、其の間君侯の禮過至らざるを、既にして素行再び江戸に歸らんとするや、淺野侯に面して曰く、「君侯の厚遇小子殆んど謝するに辞なし、然れども我が精神は、注いで一藩群弟子の頭腦にあり、故に他日若し一朝事あらば、數十百の山鹿は、忽ち闔藩の中に蹶起せん、是れ小子が、君侯の厚遇に應ふる所以のものなり。」と後ち元祿十四年、幕府殿中、松の間廊下の凶變あり、從て前代未曾有ある、義士四十有七人の仇討あり、而して其の盟主と聞えたる、大石内藏助良雄

は實に是れ山鹿が、再び故ありて赤穂に行きし時の門弟あり
といふ、又其の條四十六士の内にも、曾て山鹿の薫陶を受け
しもの少ちからせと云へば、茲に至りて、素行の言亦空しか
らせと云ふべし、實に赤穂四十七士は、山鹿の變身分体の活
動せるものと云ふも可あり。

◎大石良雄

○講席の午睡

大石内藏之助良雄、其の文の師には、伊藤仁齋を求め、又其
の武の師には、山鹿素行を求む、實に文武共に良師を得たる
ものと云ふべし、良雄曾て仁齋の門に遊ぶや、一日其の講席

に列して之を聴く、既にして睡々たる午睡の境に入り、更ら
に搖々として華胥の國に遊ぶや、衆生皆之を罵りて曰く、「
嗚呼彼れ懶惰漢、先生の講席に於て、午睡するや此の如し、
彼れ何ぞ痴態の甚だしきや、」と皆之を排斥せ、仁齋之を聞
き、衆罵を遮りて曰く、「汝輩敢へて妄りに彼れを譏ること勿
れ、予を以て之を見れば、彼れが此の衆人稠坐の中に睡眠す
るは、敢へて怠慢の痴態を露はすにあらせ、彼れ其の午睡の
中には、無量の剛毅と議見とあり、想ふに彼れ必らず事に耐
ふべし、」と後ち遂に義士四十七士の盟主と爲りて仇を討つ、
茲に至りて仁齋の明炬の如しと云ふべし。

○赤穂鹽業の濫觴

大石良雄が、義士として激稱せらるゝは、世人の夙々に知る所、之各々其の激稱者の一人なるべしと雖ども、其の富國經齊策に長ぜるに至りて、世人殆んど之を知るものなし、甚だ慨歎の至りたり、曾て赤穂領内の豪商十余八協同し、其の地の物産を増殖せんとして、種々相談の末、製鹽の業を起さんとして、一同連印して出願せしに、時の家老執政は新規の事業、舊例にあきものありとして、聞濟みに相成らず、再三出願すれども前同様の沙汰にて、出願人は皆な大いに失望して在再歲月を經過せり。

既にして大石良雄の藩政に參するや、先きの製鹽業出願人等は、今回の家老は、明大夫なりと聞き、右出願の如きは必らず直ちに聞き濟みにあらん、と一同大いに喜び、願書を差出したるに、豈に圖らんや其の事柄の取調べもなく、只だ願書を預かられたるが、斯くて數年を経れども、何等の沙汰もなきより、出願人一同の云ふやう、「ア、家老は即ち家老なり、何時とても道理の分る家老はなし、瓜の蔓は、常に瓜にて、亦茄子の實らざるぞ遺憾なる」と皆な窃かに爪弾きして嘲笑せられたり。

斯くて十有余年を經過せられたるに、良雄は突然先きの出願

人を呼び出し、之れに命を傳へて曰く、「汝等囁を待ちかねたることあらん、先年差出したる、製塩の願ひ今日之を聞届くべき局、宜しく其の業に着手せらるべし、」との沙汰に、一同は皆お大いに打ち驚きながらも、且つ喜び、直ちに其の製塩の業を開始せられたるが、右の出願者の中、他日良雄に面會せし時、先きの所爲、餘りの不思議さに、良雄に向て其の所以を問ふに、良雄答へて曰く、「左れば其の事あれ、先きに汝等の願ひ筋は、尤も至極あり、然れども此方の思ふ所にては我が領内は、山林皆を樹木に乏し、汝等の目論見通り、果して塩を製せん乎、其の影響勢ひ忽ち薪木の値を引上げ、折角

物産となるべき事業も、之れが爲めに蹉跌し、差引き損耗を生じ、其の得失相償はざる所、終に其の業半ばにして倒れ、從て汝等も亦其の家産を傾けんこと必せり、是れ豈に策の得たるものからんや、我れ是れ以て先きに汝等一同の願書を見しより、直ちに領内一般の山林に、年々苗木を植付け、又其の濫伐を禁むる、茲に十有余年、見よや彼の山も此の林も、樹木鬱然、前日の觀にあらざ、然らば是れより一同の目論見通り、塩を製するも、敢へて薪木に不足を感じるの憂ひなく其の業必らず將來に永續すべし、但し今日まで我が意を、汝等に沙汰せざりしは、領内一般の經濟を知らざるもの、彼の

苗木植付の事を以て、汝等十余人の爲めにするやう相聞えて
 心苦し、或は多少の故隙も起らんと掛合して、斯くは今日ま
 で沙汰せざりしかり、是れ聊か予が意を用うる所、宜しく此
 の旨を体せよ、と之を聞き、皆ふ一同其の遠大の識見に散服
 せり、赤穂鹽の今日の熾盛を見るは、全く之れが爲めありと
 いふ、嘻々良雄が遠見亦驚嘆すべきものあり、只だ此の事多
 く世人の知らざるぞ遺憾ある。

◎島津久光

○臣を視る君に如かむ

明治十年、西南の變起るや、柳原前光勅使と爲りて、島津邸

に臨まるとや、前光には話次久光を詰りて曰く、「西郷隆盛は
 公の舊臣あり、然るを彼は其の不軌を圖るを知りながら、何故
 之を制せざりしや、甚だ其の意を得難し、」と久光儼然客を正
 うして曰く、「嗚呼何ぞ其の眼界の明らかならざるや、南洲は
 豈に區々たる薩摩の豪傑あらんや、彼れは實に天下の豪傑お
 り、彼れが眼中には薩摩なく、又此の久光を、彼れ實に久
 光の舊臣たるに相違なし、然れども彼れ天下の爲めには、久
 光をも敵とするに躊躇せざるの豪傑なり、何ぞ區々たる久光
 輩の言を以て、其の主義を左右するものならんや、嗚呼卿等
 已に彼れを以て、薩摩の豪傑ありと思ふ、是れ蓋し彼れが反

せし所以あり、」と嘻々子を視るふと親に如かず、南洲を視る實に是れ舊主久光に如くものあり、其れ然り、南洲は是れ天下の豪傑あり、豈に其れ薩摩の豪傑あらんや。

◎山 内 容 堂

○短所を矯むるの雅號

諸侯其の主公は、動もすれば長袖其の眞の用に耐へせ、然れども維新前後には、諸侯其の主公にして、亦其の人に乏しからせ、曰く島津齊彬、曰く島津久光、曰く水戸烈公、曰く越前春嶽、曰く之れに加ふる土佐藩主、山内容堂の如きは、其に五指中に屈するの人傑なるべし、容堂其の本名は豊信と云

ふ、嘗て雅號を、藤田東湖に請ふ、東湖乃ち容堂の二字を書して之れに與へ、且つ之れに告げて曰く、「閣下よ、閣下は實に是れ聰明餘りありて、局量足らず、其の器宇の狭小なるは是れ其の事を成るに妨げあり、故に彪閣下の爲めに、此の号を擇ぶ、請ふ自ら願みて、廣く人を容れよ、」と彪は即ち東湖の名あり、扱ても豊信は之を聞き、深くも其の知言あるに感じ、眷々として常に之を服膺し、終に能く天下に大名を擧ぐ是れ全く東湖の與ふる、雅号の然らしむる所あり。

◎坂 本 龍 馬

○英雄にして能く英雄を知る

坂本龍馬は、土佐藩士、幕末土佐藩海援隊長として大いに名あり、曾て薩の西郷隆盛と會し、或は大きく、或は小さく、天下國家の形勢に就いて談説する所あり、既にして龍馬は幕の勝安房に會し、語るに先きに西郷南洲に會せしことを以てし、且つ曰く、我は先きに始めて西郷に會するや、其の人物茫漠として、更らに摸捉すべきかし、試みに小さき問ひを提げ、少しく彼れが腦中を叩けば、彼れ小さき音を發して之れに答ふ、我れ又大いなる問ひを出し、大いに彼れが腦中を叩けば、彼れ立從て大いなる響きを發して之れに答ふ、彼れは實に不思議の洪鐘なり、」と安房之を聞き、思はず手を拍ち稱

賛して曰く、「嘻々其れ千古の格言と云ふべし、足下の西郷を評するや好し、凡う人を見るの標準は、元と是れ自家の識慮にあり、即ち英雄にして能く英雄を知る、其の身英雄からんば、如何ぞ能く世の英雄を知らんや、今足下が西郷を評するの語以て、足下の人物を知るに足れり、足下亦當世の英雄と云ふべし、」と云はれしとぞ。

鬼雄外史曰く、此の言の如くんば、勝安房亦一英雄と云ふべし、何ぞや英雄にして英雄を知る、英雄を知るものは、亦一の英雄ありとの論法を以て、坂本は、西郷の英雄たるを知るが故に英雄ありとすれば、勝も亦坂本の英雄たるを

知るを以て、是れ亦均しく英雄ありと云はざるを得き、但し世已に其の名を成せる英雄を知るは、何人も能く之を知る、即ち今日にありて、上野山玉盞に元立する、西郷其の人の英雄たるは、三歳の小兒尙ほ且つ之を口に布く、只だ未だ世に其の名を成さざる、潜龍の英雄を知る、是れ甚だ難しとする所なり、勝の所謂、英雄にして始めて英雄を知るといふは、此の未だ名を成さざる、隠れたる英雄を知るを云ふなり、即ち幕末の當時、西郷未だ眞に英雄の名を成さざるなり、坂本亦然り、而して坂本能く西郷の英雄たるを知り、勝亦坂本の英雄たるを知る、是に於て乎、西郷は

勿論英雄にして、坂本も亦英雄と云ふべく、勝亦英雄と云ふべし。

◎平賀源内

○天狗小僧

平賀源内は、元と是れ讃岐高松藩士なり、幼にして穎才敏捷人皆な之を稱して天狗小僧と云ふ、一日小僧途上偶まゝ藩の家老某に遭遇す、某曰く「小僧チト我が邸に來らるべし、好き菓子を興ふべきに」と愛嬌を以て之を云ふは、小僧亦家老に向て曰く「家老殿も亦チト我が家に來り玉へ、澁茶にても入るべきにと、所謂賣言葉に買言葉、傍らに之を聞くもの

手に汗を握りつゝ、其の小僧の過言を危めるに、家老亦敢へて之を咎めず、彼れ其の慧敏あるに、舌を巻いて去れりと云ふ亦驚くべき小僧にあらざや、天狗小僧と云ふも亦宜かる哉

◎大塩平八郎

◎兩雄の初對面

世に英雄の初對面も多しと雖ども、而かも未だ近藤重藏と、大鹽平八郎との初對面の如く、凄然たる光景あるものを聞かざるあり、平八郎大坂町奉行組與方たりし時、大坂弓奉行近藤重藏の英名を聞き、一夜之を訪ふ、頓て一人の老僕出で來りて、一書院に案内と、平八郎乃ち座に着いて之を待つや久

し然るに主人重藏は何他へ行きけん、待てど與らせど更らに以て來らず、又其の咳聲だに聞えせ、燭淚は堆をかして、更漸く闌かり、平八郎は豫てより重藏の傲慢なる、其の人を輕蔑することを知せるを以て、敢て深くも異まざりしが、去りては餘りの待遠しさに腹立たしく、扱てこそ聞きしに優る無禮の曲者あり、と獨語しつゝ、不圖四邊を見廻せば、床の間に安置する百目銃は、是れ確しかに主人の愛藏、製作も頗ぶる美にして、銃身亦爛として燈火と相ひ映じ、硝藥亦備はりて傍らにあり、平八郎斜眼に之を見莞爾として笑みを含み這は時に取りての好器械とをあれ、イデヤ彼れ傲慢者の荒

膽を挫き呉れんぞ、と彼の百目銃を取りて硝薬を装ひ、火蓋を切りて轟然放てば、室内のことゝて反響に反響し、迅雷の落下せるが如く、屋壁震動し、硝烟室内に充滿し、轉た凄然たるものあるに、此時主人重藏靜かに襖押開かせ。左手に烟草盆を提げ、右手に烟管を執り、悠然入り來りて座に着きて曰く、「是れは御客人には、一發の御手並感心せり。」と茲に初對面相見の禮畢りて、重藏は直ちに酒杯を喚ぶ、既にして重藏又殊更らに平八郎の坐側に、一鍋を安置して、賞味を乞ふ平八郎は何心なく其の鍋の蓋を撤すれば、這は抑も如何に、一個の鼈蓋々として鍋底に蠕動す、常人なれば喫驚すべきに

流石は平八郎、少しくも驚ける氣色なく、呵々と打ち笑ひ、「是れは好下物、遠慮なく頂戴仕らん、」と小柄を抜き取りて、其の籠の首を掻き切り、血を啜りつゝ痛領すれば、流石の重藏も、其の氣膽にや服しけん、是れより互ひに相往來して、交情極めて親密なりしといふ、時に平八郎は、二十有六歳の壯雄、重藏は四十有九の老雄あり、嗚呼此の如き凄然なる初對面、社會亦何れにかあらん、世亦絶えて聞かざる所あり。

◎山田長政

○海外の奇功

元和寛永の頃、日本海國男兒の、海外に足を踏み出したる者

少なしとせせ、而かも山田長政の如く、意外の成功したるも
 のなし、扱も長政はえと尾張の人、大志ありて台湾に航し、
 既にして又暹羅に航す、此時に當りてや、大坂の敗兵、往々
 商客と爲りて、身を西南諸國に寄する者多く、外人之を怖る
 こと、恰かも鬼神の如し、暹羅國亦都府の下に居留地を賜
 ひ、之を稱して日本街と云ふ、偶々く暹羅國に内亂あり、
 四隣交もく相侵す、而して六毘最も強し、乃ち暹羅國王師
 を出して之を防禦す、長政其の行軍に紀律なきを見て、私か
 に其の敗れんことを云ふ、後ち兵を交ふるは於て果して然り
 是に於て人或は其の語を傳へて、國王に聞す、國王之を奇と

し、長政を招いて、其の方略を問ふ、長政答へて其の計策を
 陳るに、其の智略大いに用うべきものあり、國王大いに喜
 んで、長政を擢んじて上將軍と爲し、行いて六毘を防がしむ
 此時日本人の居留する者、實に是れ六七百人以上にして、津田
 又左右衛門、最も名あり、長政乃ち之れと謀り、數百人を糾
 合し、之れに雜ふるに土兵を以てし、茲に一隊の兵を編成し
 着するに日本の武裝を以てし、日本の援兵大いに至ると聲言
 す、六毘の軍之を聞いて、兵氣俄かに沮む、長政其の兵を進
 めて大いに之を破る。

既にして六毘王大いに激憤し、其の國の兵力を尽して來寇す

慧敏なる長政は、其の衆寡敵せざるを察し、伏兵の奇策を以て、敵軍を欺き、前後狹擊して、大いに之を破り、以て敵百人を斬殺し、北ぐるを追ひて長驅、其の國都に入り、終に六毘王を生擒して凱旋と、其の國遠近に震ひ、四隣争ひて款を暹羅に送る、是に於て國王大に之を賞し、又左衛門に妻いすに其の女を以てし、又長政を封せるに六毘及び逸皮留の地を以てし、号して唵普良と云ふ、蓋し唵普良とは、暹羅語即ち諸侯王の義なり、嚙々一介の漂客、一國の王侯と爲る、其の龍驤亦驚くべきものあり。

◎高山彦九郎

○大喝一聲萬岳震動を

寛政に三奇士あり、曰く高山彦九郎、曰く林子平、曰く蒲生君平即ち是れあり、高山は上野の人、曾て江戸にあり、偶ましく年饑饉にして、所在盜賊蜂起し、上野國亦穩かからせ、彦九郎之を聞き、奮然蹶起して曰く、「ア、我が故國をして此の不良の事あらしむべからせ、我れ死力を出して之を處理すべし、」と知友江上關龍の許に至り、由を告げて辞別す、關龍其の行を危み、共に往いて之を援けんと云ふ、彦九郎之を欲せき、關龍其の志の奪ふべからざるを知り、即ち一計を施し殊更らに別宴を設け、臆するに甲冑一領を以てす、彦九郎乃

ち喜び受けて別れ、獨行して板橋驛に至る、時既に夜なり、彦九郎驛の中央に架する橋上を過ぐるに物あり、以て途を遮る、彦九郎怪んで之を熟視すれば、即ち二人の男子、天を向いて臥するなり、兩尻は高くして頭部は低し、其の狀殆んど滑稽の体にして、而かも二人連絡し、其の位地之を踏まざれば行くべからず、彦九郎之を憂ひとし、屢ばく呼べども應へず、是に於て彦九郎思ふやう、是れ官道なり、彼れ之を塞ぐは無狀あり、之を踏み行くも、何の不可あることのあらん、と乃ち其の凹處を踏んで過ぐ、二人忽ち蹶起し交もく呼んで曰く、「汝無禮にも我等の頭を踏む、咄々怪事、相當の

謝意を爲せよ、」と而かも彦九郎は敢へて之を顧みず、其のまゝ通過せんとす、二賊激して刀を抜き連ねて之を追襲す、彦九郎乃ち願腕大喝一聲之を叱咄す、其の聲四隣に響きて、連軒皆を鳴る、二賊愕然喫驚、逡巡辟易、戰慄して逃走す、彦九郎は其のまゝ敢へて再び顧みず、疾足往いて郷國に達し、一旅宿に投じ、一酌を命ぜ、時に隣室に喧呼して酒を飲むものあり、彦九郎思はず之を窺ふに、其の徒十數人、關龍又七等も亦其の中にあり、彦九郎大いに怪み、直ちに入りて其の故を問ふ、關龍答へて曰く、「我れ私かに君の行を危み、徒を率ゐ途を異にして先づ發し、事平ぐに會ひ、今將さに歸らん

として、茲に會領するものあり、」と彦九郎は、事已に平ぐを聞いて大いに喜び、歡然酔ふて、共に江戸に歸る。

其の後ち前の橋上の賊、捕史の爲めに捕へられ、其の舊犯を自白して曰く、「我れ臂力百人に敵す、未だ嘗て恐怖のことあるを、只だ先きに板橋にあり、旅人を要して、金を奪へるに、一夜眇小丈夫に遇ひ之を劫さんとす、彼れ却て瞋目して我等を叱咤と、其の聲吼雷の如く、今尙は耳にあり、苟且に想ふも、悚然として戰慄す、」と其の所謂眇小丈夫とは即ち高山彦九郎是れなり。

◎林子平

○二奇士の背離

下野の奇士、曾て林子平の人と爲りを聞いて、遙かに之を慕ふ或時遠く仙合なる子平の家を訪ふ、君平元來人と爲り、其の稟性真率にして、敢へて邊幅を飾らず、敝袴短褐、行装亦頗ぶる鄙野なり、是に於て乎、子平之を見て叱して曰く、「ア、是れには何等の窮苦無頼漢ぞ、自ら修ひる能はせして、天下を論せんや、予は敢へて之を見るを欲せせ、」と君平之を聞き、亦大に怒りて曰く、「野翁何ぞ其れ自ら尊大の甚だしきや」と其の餘一語を交へて去れりと云ふ、奇も茲に致りて、慨嘆すべきものあり。

◎蒲生君平

○慷慨の氣煽滿場を壓す

蒲生君平の下野古河にあるや、日々故友と往來して談論す、君平元より忠孝の事に、熱心に慷慨の氣、恰かも肺肝より出づるが如く、自ら支へんとして、殆んど支ふる能はせ、嘗て一夜客と共に涼を納れて會飲せ、酒酣にして、君平起ちて廁に行く、蚊軍雷の如く、其來襲刺衝殆んど堪へせ、君平之を昔とし、廁中の團扇を揮ひて臂後を拂ふ、過ちて其の不潔に染む、此時他客の席にあるもの、杯盤餼酬の間、談偶まゝく楠公のことに及ぶ、一客曰く、「ア、楠公の死せるや、尙ほ少

しく早し、云々」と他客皆な雷同して、其の論を賛成す、君平圓中にありて之を聞き、勃々たる不平禁する能はせ、忽ち廁を出で、其の手に持つ團扇を据ひて、前論を辨駁排斥す。滿座其の臭氣の甚だしきを異み、皆を鼻を掩ふて起つ、時に家婢酒を荷んで席に來り、君平の振ふ所の團扇を指して曰く「ア、彼れは圓中の物あり」と之を見れば、半面己に不潔に染む、而して席上の杯盤器物、君平の衣袴に至るまで、皆を点々として汚染せざるはなし、衆客皆な呆然たり、嚙々君平の慷慨氣節、概ね此の類なり。

◎近藤重藏

○北門警備の着服

北門の警備、敢て今日にして始めて之を知るにあらざるなり
 即ち百年の昔より、己に之を知るものあり、幕吏近藤重藏の
 如き、最も早く之れに着眼したるものあり、明和天明の頃、
 北夷屢ばく我が北境を侵と、重藏之を聞き、慷慨悲憤、切
 齒扼腕して曰く、「ア、連年彼れ北夷の來寇蠶食する所に任せ
 て顧みせ、今にして早く之れが警備を爲さずんば、他日必ら
 老國家の大患を爲さん」と是れより其の心竊かに蝦夷探險に
 従はんと期す、偶まゝ幕府其の事を議を聞き、重藏即
 ち蝦夷地警備の事を論じ、當局有司に建言と、時に寛政九年

あり。

既にして翌年、幕府吏員を遣はして、蝦夷を經營と、勘定奉
 行中川飛彈守、近藤重藏の才略、其の用うべきを知り、支配
 勘定に任じて、其の北行大使に隨行せしむ、是に於て重藏始
 めて蝦夷に入り、大河内政壽の部下とあり、以て東蝦夷を探摘
 し、終に國後島に渡り、單身擇捉島に渡らんとす、擇捉とは
 即ち今の千島本島是れあり、抑も此の間の海峡潮流險惡
 にして、狂瀾怒濤山の如く、夷船形小脆弱にして、其の覆へら
 んどすること屢ばくあり、重藏以爲爲へらく、「好し不幸に
 して鯨腹に葬らるゝことあるも、儻父にして死するを耻づ、

且つ國威を損ざるの憂ひあり、」と乃ち船中甲冑を出して之を撥く、時恰かも八朔にして、烈風海波を激し、巨濤山の如く飛玉半空に舞ふ、船は恰かも小葉の如く、九天の上に上るかと思へば、復た忽ちにして九地の下に下る、船員死力を尽して船を操縦す、而かも船体廻轉して、殆んど其の方位を得せ今は其の殺没を待つより外、亦他策ふさに至る、重藏大刀を引き抜き、夷人を指揮し大呼して曰く、「汝等体力のあらん限りを尽せよ、力めざる者は直ちに斬らん、」と夷人は是れにや怖れけん、皆を能く其のあらん限りの力を尽して之を力め、船漸くにして彼岸に達するを得たり、實に重藏の如き、大丈夫

の精神を具したるものと云ふべし。

◎高田屋嘉兵衛

○眞個海國男兒

寛政十一年、幕府蝦夷を開拓せんと欲し、有司に命じて諸島を巡察し、戍兵を發して邊警に備へしむ、而して擇捉は要衝に當り、而かも海路險惡、容易に航し難し、有司之を憂ひ、乃ち令を發して能く航するものを募る、茲に高田屋嘉兵衛大志あり、是れより先き蝦夷に航してあり、此の募集令を見るや、否や忽ち慨然として其の募りに應じ、自ら堅牢にして且つ波除け高き巨船を造りて發し、先づ國後島の北端に至り、

風潮を洋中に候ふこと二旬、始めて得る所あり、謂て曰く、我れ熟々之を視察するに、三流の潮あるのみ、敢へて暗礁の怖るべきものあるを、故に只だ能く潮汐の衝を避くれば、航海も亦敢へて難事に非らざ、と七月十八日を以て帆を揚げて、直ちに擇捉島角タンネモイに着し、更らに轉じて紗那河口に入る、兩岸の島地、極めて曠邈にして人烟稀有に、夷民半ば穴居し、沿海漁獵の洪利ありと雖ども、皆な樂て、顧みず、嘉兵先づ水層の淺深、風候潮流を測り、會所を立て、漁場十有七ヶ處を開き、且つ倉庫建築の地を相し、又一轉して内保に至り、地形を視察し、同月廿八日發船し、アトイヤ

に歸りて幕吏に命す、即ち嘉兵衛は、其の至る處に、漁具及び衣食を給し、其の業を獎勵し、諭すに國恩を以てす、是に於て夷民大いに悅服し、擇捉島茲に始めて我が國威を仰ぐに至る、是れ實に嘉兵衛の効果なり。

◎間宮林藏

○百年前單身西比利旅行

明治の天地、福島中佐の、單身西比利旅行、敢へて異數と爲すに足らざるなり、百年の前、早く己に西比利内地、單身旅行を企つるものあり、之を間宮林藏と爲す、林藏は元と是れ常陸の人、斗大の膽方あり、曾て蝦夷樺太より、更らに西比

利内地を探検せんと欲し、文化三年、蝦夷に向て發す、其の苦辛慘憺、能く筆墨の形容する所にあらず、而して林藏が、其の最も心神を勞したるは、途中從夷の恐怖して、其の遠行を肯んせざるにあり、又其の食物の欠乏にあり、林藏其年六月廿六日、書を作りて從夷に附興し、且つ命じて曰く、「我が從來探窮する所の結果、記して此の冊子に尽く、我れ今不測の異境に入らんとす、我れ元と敢へて生還を期せむ、若し我れの歸らざる時は、彼歸りて之を自主の廳に致せ」と遂に夷船に乗りて、ノテト岬を發し、海峽を渡りて、東韃に入る、此時三伏の候と雖も、朔風殊に凜冷にして、毎日煙霧濛々

として、其の衣裳の濕潤すること、恰かも雨中簑笠を着するが如し、而かも剛毅の林藏は、敢へて之を意とせず、既にして東韃の彼岸に上陸するに、其の道路の險惡なる、僅かに以て鳥跡獸徑の在に有するに過ぎず、或は舟を肩にして山上に上り、或は夢を岩角汀邊に結び、險を攀ち難を冒し、幾回の虎の尾を踏み、毒蛇の口に逢ひ、遂に能く徳楞哩府に入り、茲に清國の夷官に接し、其の地勢民情を探問して得る所あり均しく是れ無人の郷を旅行せ、寧ろ新地を跋渉せん」と更らに別路を踏んで歸る、即ち其の年十一月松前に達し、後ち其の紀行を一書と爲し、題して「東韃紀行」と云ふ、樺太西比

利の間、今に至るまで、人之を稱して「間宮海峽」と云ふ實に間宮の如きは、鉄腸鉄脚の偉人と云ふべし。

◎原田孫七郎

○呂宋占領策

三百年の前、若し能く原田孫七郎の策をして圖に當らしめば、呂宋馬尼羅群島は、皆な我れの有あらん、何ぞ西班牙をして長く獨占せしめん、又何ぞ米國をして容喙せしめんや、抑もく原田孫七郎は、天正文祿の頃の海商あり、而かも斗大の膽力は、南洋諸島を併呑するの氣慨あり、其の心に以爲へらく「嗚呼彼呂宋群島は、宇兵怯懦かり、若し我が我國百練

の武力を加へば、恰かも秋の病葉を拂ふが如くならん、日本武名の餘光、何ぞ遲疑すべけん、と豊臣秀吉の近臣橋田某に由りて、此の趣きを進説し、以て呂宋占領を勸む、去らぬだに己に大志宇宙を吞吐し、勃々たる大功名心火の如き秀吉は直ちに其の策を納れ、乃ち一片の招降書を與ふ、書中、時日移さず降幡を偃せて來服すべし若し旬菊膝行遅々するに於ては速かに誅伐を加ふべき者必せりとの語あり、其の傲慢なる、實に驚くべきものあり、是れ彼の朝鮮征討に先づ一年、即ち天正十八年のことあり、蓋し原田にありては謂へらく、「ア、故なくして來貢を促す、彼れ必

を激せん、而して彼れが激せる所は、即ち我が出師の辞ありと其姪原田喜右衛門をして、太閤の招降書を、呂宋太守に致さしむ、然るに此時呂宋は、偶ましく葡萄牙人の葛藤あり、更らに他國と干才を交ふるを欲せず、故に彼れ其の心、太閤の不遜を憤ると雖ども、而かも意外にも之を領承し、彼れ使節を長崎まで遣はして答禮せしむ、是に於て乎、原田の献策は、畫餅に屬せり、後ち原田は再び第二策を畫し、更らに第三策を畫すと雖ども、事皆な不幸にして蹉跎す、甚だ鴻歎の至りあり。

◎支倉六右衛門

○呂宋併呑の素地

豊太閤の歿後、密かに天下を取らんと欲する者五雄あり、曰く徳川家康、曰く黒田孝高、曰く石田三成、曰く直江兼續、曰く伊達政宗即ち是れなり、然り而して慶長五年、關ヶ原の一戦以て、天下の大勢定まり、中原の鹿は、家康の掌中に入り江戸覇府の鼎は、已に磐石の基礎を固められ、亦得て動かすべからざるに至るや、東北の曠原に睡眠を、獨眼龍の老雄伊達政宗は、快々として樂ませ、既にして内國に盡するの大志を一轉して、圖南の鵬翼を、南洋呂宋群島に張らんとす而して呂宋は是れより先き己に西班牙の領土として、彼れか

政令を受くるや、茲に年あり、故に呂宋を討んとするや、必らず先づ西班牙の兵力を測らざるべからず、是に於て乎、宗教に托して、西班牙、并に羅馬に使節を差遣せ、其の任に當るものは、實に支倉六右衛門即ち是れなり。

抑もく支倉六右衛門は、政宗股肱の老臣にして、曾て朝鮮征討の役に従ひて、屢ばく戦功ありしものあり、慶長十八年九月十五日、支倉六右衛門は、我邦無前の遠使、國主政宗の使命を帯びて、陸奥國牡鹿郡月浦を出帆す、時に政宗慨然七絶を賦して送る、其の詩に曰く、

邪法迷邦唱不終 欲征蠻國未成功

圖南鵬翼何時奮 久待扶搖萬里風

と既にして支倉の一行、九月二十一日を以て呂宋に達し、種々視察する所あり、而して更らに船首を一轉し、太平洋を横斷し、其年十二月十六日を以て北米墨其哥に達し、此に船を棄てり上陸す、即ち陸路墨其哥内地を經過し、翌慶長十九年五月四日、東方西班牙に向て乗船し、大西洋を直航し、其年八月十四日、始めて西班牙に達し、同年十月三十日、西班牙の首府マドリードに入り大いに視察する所あり、六右衛門此地に留ること半歳、翌元年八月八日同府を發し、伊太利國羅馬府に着したるは、同年九月七日あり、此に留る數月にして、羅

馬府民の議に従ひ、府民に編し、譏員に列し、更らに貴族と爲る、爾來羅馬に在留する數年、既にして元和六年、恙なく月浦に歸朝す、即ち其の齎らすもの總て十九種、之を政宗に獻じて復命し、且つ海外の形勢を縷陳す、其後政宗の野心果して如何、當時彼れが航海の熾なる、翻りて我邦には、大船造築を禁ざる等の令あり、以て呂宋を併吞せんこと、一諸侯の兵力としては、容易の業にあらざるを看破したるにや、寂として更らに聞く所なし、甚だ遺憾の至りなり。

◎小笠原貞頼

○無人島の發見占領

元とは稱して無人島と云ふ、後ち改めて小笠原島と云ふ、今は東京府の直轄と爲る、其の何故に稱して小笠原島と云ふ乎之を知る者殆んどあるなし、是れ即ち剛毅の偉人、小笠原貞頼の發見する所、因て以て小笠原島とは命するなり抑もく貞頼は、信州深志の城主、極めて大志あり、文祿征韓の役には、軍監と爲りて大いに功勞あり、文祿二年、貞頼一旦歸朝して、肥前名古屋の行營には秀吉に謁見を、時に徳川家康其の側らにあり、秀吉に謂て曰く、「貞頼屢ばく戦功ありて、未だ之れに報ゆるに及ばず、請ふ海外無主の島嶼を發見せしめ、以て之を賞賜せん、」と秀吉之を許す、是に於て家康は貞

頼に朱印券を授け、大洋に航して島嶼を求めしむ、貞頼大いに喜ぶ、既にして東歸の後ち、直ちに船に乗りて、渺茫無際ミの南溟に入る、船航敷日、水天髣髴として更らに見る所なし貞頼敢て屈することなく、益々舟手を指揮して南航するに八丈島の南方、凡そ九十里、島山起伏相連なるを望見を貞頼大いに喜び、快駛近づいて岸に上るに、大小數十百の島嶼あり、以て頗ふる豊饒を極む、然れども只た鳥戰草木を見るのみ、其の間敢へて人を見せ、是に於て貞頼は、名島跋渉探討、地圖を製し、土産を收め、父島母島の二大島に、二個の大標木を建て、曰く、

日本國天照皇太神宮地、島長源家康公幕下小笠原正四位少將民部小輔源貞頼朝臣。

日本國天照皇太神宮地、島長葦原將軍幕下小笠原民部小輔貞頼朝臣。

と右の二大標木を建て、歸りて之を家康に報ず、家康又之を秀吉に稟言と、秀吉は貞頼の勇敢にして、新地發見の偉功を奏したるを嘉し、全島を擧げて之を賜ひ、自ら券を書いて之を証とす、家康又島名を命じて、小笠原島と云ふ、是に於て群嶋始めて我が板圖に入り、小笠原嶋の名、今に存するに至れり

◎濱田彌兵衛

○彌兵衛の膽勇蘭人を懲と

濱田彌兵衛は、幕初長崎の船頭あり、曾て我が海賊の徒を、台湾に移住せしもの土人と共に、寛永年中、蘭人の唐待を受く、而かも訴ふるに所なく、怨みを飲んで、其の時機の至を待つ、偶ましく濱田彌兵衛の至れるを幸ひとし、是に於て衆交もく、之を訴へて報復を圖る、抑もく彌兵衛は、勇歌にして且つ謀略あり、又其の弟小左衛門、其の子新藏、並に皆な膽畧あり、彌兵衛は一諾、蘭奴を懲らさんふとを期す、是に於て其の報復のことを以て、我が幕府に請ふ、幕府乃ち之

を許し、長崎の代官末次平藏に檄し、船舶を備へ、士卒を募り、以之を彌兵衛に附せ、彌兵衛は、其の従者數百人を裝ひて農丁と爲し、以て台湾海口に至り、彼れ其の守吏に請ひて曰く、「我等日本の民、台湾の土地廣く、住民少く、荒蕪未墾の地多しと聞き、移住して以て之を開墾せんと欲し、今此に來るものあり、」と守吏之を和蘭の甲必丹に告ぐ、而かも彼れ容易に住せせ、哨船を以て之を圍繞すること數重にして、俄かに上陸を許させ、彼れ人をして來り言はしめて曰く、「汝輩の來れるは、決して尋常の移住にあらず、否らざんば何ぞ其の従人の多さや、」彌兵衛辨疏して曰く、「ア、何ぞ猜疑の甚だ

しきや、若しも我が日本にして、海外の國土を略せしめんとせば、元より其の人に乏しからば、何ぞ我等小民をして之を爲さしめんや、」と因て守吏船中を檢せれば、僅かに數十振りの護身刀あるのみ、其の他は皆を農具あれば、守吏遠りて具さに之を甲必丹に告ぐ、甲必丹も其の意稍々解け、以て上陸せしむ、是に於て彌兵衛等城に入り、以て甲必丹に謁することを得、即ち其の許可を得て、台灣の民たらんことを請ふ、彼れ之を許さば、己むを得ず本國に歸らんことを請ふ彼れ、亦之を許さず、斯くて留ること數月、屢ばく入りて之を請ふ彼れ終に答へば、是に於て彌兵衛衆に謂て曰く、「嗚呼甲

必丹我れに去留共に之を許さず、其の意測るべからば、我等己に不測の地に入る、當さに死中に活を求むべし、」と衆皆を憤然として之れに同意し、與に共に事を擧げんとす、一日早旦、彌兵衛父子三人城に入る、衆亦之れに従ひ、門外に留る既に三人身を挺し門を排して進む、時に甲必丹は、獨り寢て床にあり、驚き起さ之を叱して曰く、「ア、汝等人の圍室に入る、何ぞ無禮の甚だしきや、」と彌兵衛敢へて聞き敢へば、咆哮奮進して、甲必丹を床上に生擒し、懷中より匕首を取出し、其の咽喉に擬して曰く、「汝己に重罪あり、尙は何ぞ人の無禮を咎むるや、」と彼れ甲必丹の左古劍を抜いて、彌兵衛に

迫らんとすれば、小左衛門新藏亦刀を抜いて之を遮り、瞋目して之を叱す、彼れ左右扱靡して、あへて進まば是に於て流石の甲必丹も、絶体絶命、助命を乞ふこと甚だ悲哀かり、彌兵衛乃ち曰く、「汝生を欲せば、何ぞ城上の砲門を鎖さざるや」甲必丹曰く、「謹んで命を奉せ、」彌兵衛曰く、「汝先きに掠むる所の貨は、宜しく其の數を倍して之を返せよ、」甲必丹曰く、「唯だ命之れ従はん、」と是に於て彌兵衛乃ち左手に甲必丹の臂を扼し、右手に匕首を執り、與に共に立つ、小左衛門新藏、其の前後を擁して出づ彼れ蘭兵あへて動かさ、甲必丹命を傳へて砲門を鎖せ、彼れ其の蘭卒をして蕃船一艘、及び日本船

二艘を贓せしめ、山積の、貨及び人質を取りて、長崎に歸報せ、彌兵衛の如きは、眞に海國の偉男子と云ふべし。

◎紀伊國屋文左衛門

○紀文の豪奢

一代に巨万の財を得て、又一代に之を蕩尽したるもの、世亦紀文の如きものあらざるあり、而して紀文が半世にして、巨万の豪富を積める、其の冒儉立身談、世已に人口に膾炙せ、今將た語らばして可かり、又其の遊蕩撒貨談、能く世人の知る所、深く語らずして可なり、只だ彼れが豪奢の一端を示さんに、豊屋職人の如きは、一年三百六十余日、常に七人づ、を

雇ひ置き、客人の来る毎に、新らしき襦を敷替へしといふ、其の豪奢豈に亦驚くべきにあらずや、又紀文は曾て北廓に通ふに、常に同一摸様の衣服のみを着せしかば、相方の遊君は當世の豪商紀文とも云はるゝほどのものが、連日同一衣服を着るは奇怪なりとて、密かに衣服の裏に目標を着し遣るに翌日來りて之を検すれば、即ち其の目標なし、更らに又再び其の細標を附し遣り、翌日來りて之を検すれば、又其の目標なし、此の如きもの十數日に亘るも、曾て其の附標を見たることなし、是に至りて遊君も、其の目標を附くることを止めたりと云ふ、是れを以て之を見るに、紀文は、一枚の衣は、

再び之を肌に触れしむるよとなきものと見えたり、嗚呼其の豪奢亦驚くべき哉。

◎錢屋五兵衛

○五兵衛の膨商富身策

錢屋五兵衛が、海國男子の本領を具へ、私船遠行貿易を以て其の巨万の財を得たることは、世人の能く知る所あるが、彼れが其の最も巨財を積めるは、天保七八年、大飢饉の際にあり、所謂禍を轉じて福と爲すとは、其れ是れの謂ひ乎、抑も天保七八年には、何方も同じ慘狀を極めたるものあるが、加州藩の如き、亦財政頗ぶる困難を極め、進退殆んど谷まる所、

終に領内の月達豪商を集めて、右恢復の策を諮問するに、衆敢へて答ふるものなし、時に五兵衛席末にあり、策を献じて曰く、「國力の富足を圖るは、船を浮べて高利を開くにあり、官若し拙奴をして此事に當らしめば、誓ひて回復の功を奏せん、」と藩議之を容れ、巨船二艘を新造して五兵衛に附せ、是に於て五兵衛は、多く國産を載積し、幔幕提燈等、皆を加藩の徽章を用ひ、加賀藩用船と号し、而して自家の所有船も亦皆を藩船に擬し、各地の港灣に往來し、熾んに通商貿易す、此の如くにして日本六十余州の港津、亦加州藩船の碇泊あらざる處なく、遂に之れが爲め加藩の財政も整理し、從て五兵

衛の富は、海内亦其の比を見ざるに至る、是れ其の實は、密かに國禁の外國貿易を爲すものあればあり、五兵衛其の膽の大いなる斗の如きものあり。

◎白川樂翁

○人情の極意

成人曾て白川樂翁に問ふて曰く、「予は今回某方へ養子に行くこととなりしが、養子の身として、其の國家を治むるは、殊に難しと聞く、足下は己に養子として、他家を相續したる身あれば、其の艱難辛苦のほども知り賜ふべし、願くは教へを垂れ玉へ、」と樂翁答へて曰く、「ア、失禮ながら其のお言葉が

宜しくなし、何ぞや養子實子と、我れより隔てなば、人も亦左様の隔てをなとべし、我れ若し實子と思ひて取へば、先方も亦實父と思ひて之を愛すべし、故に予は養實無差別の外、亦言ふべきこともあし、」と實に人情の當然、亦感服の至りなり

○萬金の機智

所謂徳川幕府、寛政の改革あるものは、白川樂翁即ち松平定信の其の衝に當りて之を爲せるものあり、實に其の表面婦人好女の如くにして、其の内心氣節の活潑ある、樂翁の如きは殆んど稀れなり、茲に徳川十一代將軍家齊は、元と一ツ橋家より出で、宗家を繼ぎしものあるが、誰れしも吾が父に、

高地位を得させ度きは、人情の常態、流石賢明ある家齊も、亦此の人情にや漏れざりけん、當時其の實父治済の一ツ橋にあるを、西丸に移して、大御所と崇めんとの念慮盛んあり、治済も又心中切に之を望まれたることなれば、將軍家齊嘗て一日、執政松平定信及び松平信明の二人を召して之を諮ふに二人共に斷乎として、其の然るべからざるを對ふ、理固より然るべからざるものあればあり。

然るに其の後ち又一日、家齊は樂翁を召し、強ひて前日の旨を行はしめんとせしに、樂翁は餘り我が父に偏するの所爲、世評の恐れもありとて、堅く其の不可の旨を執りて動かす、

頗りに強諫して止まざれば、家齊は艶然として色を變じ、刀を抜いて將さに樂翁を斬らんとせし、危機一髪、アチャと見れば、傍らに侍りし平岡頼長、其の所以を知らざる真似して曰く、「越中守(定信)よ、御佩刀賜ふかり、疾く拜受し玉へ、」と家齊は、既に之を斬らんとせしが、流石に刀を下し兼ねて、稍々躊躇の折りから、此の聲を聞いて之を機とし、刀を抛ちて内宮に入れば、樂翁は乃ち其の刀を拜受して退けり、機智も茲に至りて、万金の價ありと云ふべし。

◎上杉鷹山

○上杉家再興美談

上杉家は名家にて、祖先景勝の越後にありし時は、提封數百萬收入の多き殆んど數ふべからざる程ありしが、後ち會津百萬石に移され、又再び米澤三十萬石に移され、遂に寛永十五年三たび削封せられて、十五萬石となる、而かも其の封疆多くは山澤荒土にして、實際の收入は、十五萬に達せず然るに其の養ふ所の藩士は、三四十萬石の諸侯よりも多く、大小の諸士、凡そ六千人ありて、君臣共に大藩の餘風に慣れ、奢侈の弊、容易に抜く能はず、國帑日に空乏を告ぐるに至れり之れに加ふるに上杉家は、其の石高に於て、十五萬石あるも、其の格式に至りては、卸三家に亞ぎたる特異の格式あり

之を要するに其の費用は、中々容易の事にあらざり、終に寶曆
 明和の頃に至りては、堂々たる十五万石の大名にして、僅か
 に五兩の金さへ得る能はざり、其の窮乏も亦極まれりと云ふべ
 し、此の如く窮乏益々く窮乏となりて、上杉彈正大弼と書
 したる符は、鍋釜の金氣を抜き去るとまで云ふに至れり、豈
 亦癡態に至りからざや。

嗚呼此の如き窮乏極まるの時に當りて、鷹山公治憲は年甫め
 て十七、秋月家より入りて、上杉家の封を襲ぐ、始め江戸櫻
 田の邸に居たるが、明和六年十月、治憲其の歳十九、始めて
 江戸櫻田の邸を發して國に就く、蓋し三百諸侯の始めて國入

するや、實に一代の晴れにして、其の儀式、其の行列、實に
 天下の壯觀を極む、故に諸侯たるもの、亦金銀綾羅の間に其
 の身を埋め、警蹕の聲叱々として、衆民の匍伏、道傍に羅拜
 するを見るのみ、然るに獨り治憲は之れに異なり、名は十五
 万石の諸侯ありと雖ども、府庫は空乏して、諸士日夜飢寒に
 泣き、國土は荒れて、滿目荒涼、殆んど野に耕するものなく、
 孤影熒々、亡國の夢を載せて、山河百里、就國の途に上る、
 時正に十月、茅店の雞聲、板橋の霜月も、治憲の身には、風
 流韻雅の心を起さしめずして、眼に入るの山河、悉く是れ前
 途の國運を悲吟せしむるの媒介たらざるはあし、ア、長亭短

驛、已に行き尽して、將さに其の領内に入らんとして、板谷峠を過ぐ、輿中火を吹くの聲あり、衛士怪んで之を窺へば、治憲輿中にあり、烟管の頭を口に含み、頻りに烟草盆の火を吹くあり、衛士輿側に跪きて曰く、「火をくんは何ぞ臣等に命じ玉はざる、」治憲曰く、「寡人汝輩を勞するを厭ふが爲めにあらず、心竊かに思ふ所あればあり、」と己にして一旅館に入り、衛士を召し之れに謂て曰く、「寡人始めて國に就き、將さに亡ぶるに垂々とせる衰弊を挽回して、富國と爲さんふを思ひ頻りに其の方法を案ず、偶々く烟草盆の火、將さに消えんとして、幽かに残り、恰かも我が封上の現狀に似たるものあり

るを以て、則ち之を吹き起して、元の如くせん、と頻りに間斷なく吹き居たりしに、火は次第に熾んにあり、一身の辛苦を厭はず、經營怠るなくんば、一國も亦斯の如く、挽回の運に向ふべし、豈に愉快にあらざや、」と衛士之を聞き、皆を感嘆して措かざりしといふ。

嗚呼是れ府府全盛の治下に於ける、十五万石の諸侯が、始めて入國する時の現狀あり、綾羅錦繡、豈に甞に其の夢に入り來らざるのみならんや、峻坂險路、輿中動搖の間にあるも、尙ほ且つ衰運挽回の策、其の腦中を離れざ、造次顛沛、念々家國人民の休戚を是れ憂ふ、果せる哉、爾來進みては大いに殖

産工業を奨励し、退きては大儉の主義を決行し、十五万石の諸侯にして、衣服は悉く錦服とあし、食は其の膳常に一汁一菜を限り、家屋は障子の破損したるものも切張りして、以て之を調ふ、此の如くにして辛苦經營、終身一日の如く、其の結果空しからず上杉中興の治蹟、燦然光彩を放ち、遂に人をして聖人の政、日本古今、米澤に於て始めて之を見るべしと云はしむるに至れり、豈に亦盛んならずや。

○鷹山の妙治

安永の頃、上杉治憲には、感化教導の爲めに、十二人の出役を設け、又別に姦民一發の爲めに、六人の廻村横目を設けた

るが、治憲其の出役横目に教へて曰く、出役は地蔵の慈悲を主とし、内に不動の憤怒を含むへし、横目は、閻魔の憤怒を表し、内に地蔵の慈悲を含むべし、と亦妙教と云ふべし。

○鷹山の學問勉勵

上杉治憲には、讀書學問に刻苦精勵なる、人あり其の病を生せんよとを恐れ、之を諫めたるに、治憲曰く、「否ふとよ寡人書に對すれば、則ち心胸爽然として、恰かも雨後の月を見るが如し、何ぞ病ひを生ぜるの患ひあらんや、少々の病は、却て之を治するを覺ゆるあり、」と治憲の治憲たる所以のもの、全く茲にあるあり。

◎渡邊華山

○蒐集の書畫愛惜の本領

渡邊華山は、士にして畫工、且つ慷慨氣節の人傑なり、曾て精勵刻苦好でん廣く書畫を蒐集し、以て之を愛藏す、己にして晩年、其の所藏の書畫を舉げて、皆之を藩侯に献せ、或人華山に謂て曰く、「ア、君積年深くも心を用ゐて蒐集する所のもの、今悉く舉げて侯に献せらるは、亦惜む所なからんや」華山笑て曰く、「成程然り、我れ甚だ之を惜む、故に之を侯に献せらるのみ、若し子孫の手に之を附し置かば、子孫其の貴むべきを知らざ、或は之を散佚し、或は蠹魚に付せば、予か丹

精何の益かあらん、若し子孫にして、其の貴むべきを知らば亦余の如く之を蒐集せんのみ、何ぞ父祖遺物の有無を問はんや、」と或人大いに之を感嘆せりといふ。

◎高野長英

○夢物語の危難

天保九年十月、英將モリソンなるもの渡航の説あり、時に高野長英慕議の不可なるを憂ひ、『夢物語』と題するものを著して、同志に示す、幕吏之を聞き、是れ政治を詭譎し、人心を狐惑するものとなし、之を求むるゝと甚だ急あり偶ましく知友華山、就執の報を聞き、友人某の家に往ひて、其の顛末

門ふ、友人其の實を告げ、且つ謂て曰く、「乞ふ君暫らく身を隠匿し以て時の至を待て、」と長英其の諫告を聴かせして曰く、「ア、天命遁るべからせ、亦是非もなし、」と遂に後事を親友鈴木春山に托し、自ら北の府尹に到りて自首す、獄吏長英を難詰して曰く、「夫れ夢物語と云ふは、元ど是れ夢中の記事あり、然るに書中、英國の人情風俗を記すること委曲詳細、殆んど其の實物を説くが如し、是れを以て見れば、汝は曾て彼の國に渡航したることあるに似たり、汝其れ果して渡航したることありや、」長英答へて曰く、「未だ敢へて英國に航したるよしあらせ、」吏曰く、「然らば即ち書中の記事は、皆な荒唐

無稽にして、只だ世人を盪惑するが爲めに作りしものなる乎長英色を正うして曰く、「ア、是れは官の詞ども覺に申させ、奇怪の御質問を被むるもの哉、世上未だ天に昇り地に潜りし者あらせ、然り而して能く天地の理を説くこと、恰かも掌上の豆を數ふるが如きものあり、況んや英國の如き、船舶の通る處に於てをや、何ぞ其の國情を知る能はざるの理あらんや、」と滔々一濁千里の舌鋒、殆んど當るべからざるものあり是に於て獄吏は、到底辨論を以て屈とべからざるを知り、只だ暗黒の獄に投じ、其の苦楚に堪へず、自ら降るの時を待つ長英も亦終に官吏の威に勝つ能はざるを知り、其の愛國の衷

情に發して、他意あるにあらざるの旨を述べ、以て其の宥怒を請へり、已にして其の年十二月二十八日、吏突然長英と華山とを召して宣告す、即ち長英は終身禁錮の刑に處せらる、亦意外の重刑と云ふべし。

◎梁川星巖

○詩人の慷慨家

世人の星巖を視るや、只だ其れ一詩人を以てし、其の慷慨氣節の士たるを知るもの殆んど稀れなり、星巖曾て東都神田於玉ヶ池に居を卜し、玉池社と号し、三千の子弟を薰陶し、星巖の詩名天下に高きこと、世人の能く知る所あり、已にして弘

化年中、俄かに其の社を賣りて、將さに郷里に歸らんとせ、或人怪んで之を問ふ、星巖敢へて答へて、或人強ひて問ふ、星巖已むを得て答へて曰く、「ア、江戸の地たるや、人民輻輳戸口二百万に垂んくたり、然らば一人一日五合の米を食ふとして、一ヶ月の消費米、殆んど三十万石に下らず、而して其の米多くは海運の輸す所たり、願みて近頃英虜漫に兵を諸國に加へ、其の機に乗せべきものは、皆な乗じて之を奪ふ、彼の印度の如き、又支那の香港の如き、即ち其の一例なり、嗚呼般鑑遠からざり、安んぞ知らん彼れ飽くことを知らざるや、我が豊饒の國土を覬覦することなきを、彼れ若し一朝、

我が品海を襲ふあらば、我が海運の使い、忽ちに絶せん、然らば茲に至りて、二百万の生民は、其の飢餓眼前にあり、我輩老羸の身を以て此に居る、必らきや溝察の中に轉ざるの災を被らん、是れ以て去りて故國に歸らんとするのみ、と遂に去る。

既にして星巖敢へて郷國美濃には住せざして、家を京都の東北、鴨川の上に卜し、鳴沂小隱と云ふ、星巖乃ち香を燒き書を讀んで、優逸自適し、踪を雲霞に托し、影を林壑に滅し、世と相忘る、詩を吟じて獨り樂む、故に其の間名流高士の出入るものあるも、人敢へて怪まざ、何ぞや詩を以て、相集

るものと思へばあり、然るに其の實は勤王慷慨の士集り、星巖之れが牛耳を執るあり、實に當時幕府に反對する、志士の相會する屈強の隱家たり、故に幕府の鵜の目鷹の目も、亦容易に此處に着目するに至らざりしあり。

◎佐久間象山

○獄中記臆の著述

佐久間象山曾て國事の爲め、獄に下さる、獄中徒然に耐へず一書を腹稿し、私かに題して『省誓録』と云ふ、而かも獄中筆墨を許さざ、是に於て象山は、一に皆な腦中の記臆に委ねて之を著はす、己にして出獄の後ち、記臆の腦底を搔探りて之

を筆録し、更らに之を櫻に刻して、世に公にそ、書中云へることあり、

人知るに及ばざる所にして、而して我れ獨り之を知る、人能くするに及ばざる所にして、而して我れ獨り之を能くす是れ亦天の寵を荷ふかり、天の寵を荷ふ此の如くにして、而して惟だ一身の計を爲し、天下の計を爲さざれば、則ち其の天に負ふや、豈に亦大いならず乎〔原漢之〕と象山深く自ら之を云へるなり、象山其の自家材能の務めを知る亦感服の至りなり。

◎徳川光國

○梅檀は二葉より芳し

蛇は三寸にして、早く已に宇宙を呑むの氣慨ありとかや、徳川光圀は、後ち諡して義公と云ふもの、其の名は、彼の『嗚呼忠臣楠氏之墓』の建碑と共に、轟然天下に高き所なり、光國其の年甫めて七歳、一日父頼房従容之れに謂て曰く、「我れ若し陣に臨んで劍を破らば、汝果して能く扶持して退くや否や、」光國對へて曰く、「兒敢へて退くを欲せず、父の尊体を踰え、進んで敵を斬らんのみ、」と頼房之を聞き、甚だ之を奇として寵愛せりとい、所謂梅檀は二葉より芳しとは、其れ之を云ふ乎。

鬼雄外史曰く、今試みに海外に、其の類例を求むるに、英雄中の英雄、百王の王たる、佛帝ナポレオン第一世、曾て其の年十二三歳の頃、兵學校にありて、教師一疑問を提出して曰く、「我が寡兵、敵の大軍に圍繞せられ、不幸にして味方の兵糧を断ちし時は、其の策果して如何、」とナポレオン敢へて躊躇の体もなく、忽ち答へて曰く、「味方の兵糧已に尽くと雖ども、而かも敵の兵糧にして尽さざる間は、敢へて憂ひとせず、我れ猛進突撃之を奪ひて、我が兵糧に使用せんのみ、」と顧みて徳川光國の談と、稍々似たるものあり、東西並べ稱して、好一對の美談と云ふべし。

◎徳川齊昭

○麒麟兒

近世の偉人、徳川齊昭後ち諡して烈公と云ふ、蓋し水戸家前後の二大人物あり、即ち先きには光國義公あり、後ちには齊昭烈公あり、而して義公幼時、聰明穎智あるは、前節已に之を叙述す、齊昭亦幼時の聰明、常人の及ぶ所にあらざるなり。齊昭其の年四歳、已に舉止成人の如し、一日父に面し請ふて曰く、「兒乳母の侍養を須るを、士人を以て之れに代へよ、」と乃ち近臣二人を以て之れに傳たしむ、此の歳始めて孝經を讀み、明年五歳にして始めて和歌を作る、九歳の時銃槍刀劍の

術を學ぶ、幾くもあくして其の溢奥を極め得たり、後ち稍々長ずるに至りては、日々小銃千發を以て課業と爲と、曾て近臣と歩を競ふ、齋昭一日二十余里を歩して、敢へて憊るゝの色を見ざりしといふ、人皆な其の健歩に驚けり。

◎藤田東湖

○幼童の氣慨

藤田東湖は、幼少にして早く讀書學問に精通し、以て聖人の道を講ず、曾て君侯に召され、其の面前にて昇臺を與へられ聖人の道を講ぜべしと命ぜ、東湖當時尙は鰐角の幼童、委細領承の旨にて、見台に對したれども、點然敢へて講せせ、稍

々姑らくにして尙は默然たり、是に於て傍らに侍せる近臣聲を掛けて曰く、「虎之助よ、君の御前あり、疾く開講いたし候へ、」と注意ますれば、虎之助即ち東湖容を正うして曰く、「苟も尊ら聖人の道を講せんとするに、講者より上席に座するものありては、兒之を講せる能はず、」と蓋し君侯上席にあればあり、慧敏ある君侯は、早くも之を悟り、「好し然らば寡人席を下るべし、虎汝宜しく上席に就いて之を講すべし、」と茲に三十余万石の大名、終に一臣下、殊に未だ成長せざる、一小兒の下に下りて之を聽聞すれば、虎之助は遠慮會釋もなく、上席に押上り、以て堂々として之を講ず、而かも其の辨舌爽快

にして、且つ義理分明なれば、流石の君侯も、大いに感服せられしに、虎之助は已に其の講説を終へるや否や、遙かに末座に引き下り、平伏して曰く、「只今までの無禮、平に御免下されたし、是れよりは臣虎之助の身分、御上様には、宜しく御上席に御直り下されたし、」と満座皆な其の進退の殊勝あるに敬服せりといふ、亦驚くべき麒麟兒と云ふべし。

○愛憎の區別分明

好んで其の悪を知り、悪んで其の美を知る者は、天下に鮮なし、とは聖人の歎息、而かも茲に東湖は、能く好んで其の悪を知り、悪んで其の美を知るものと云ふべし、東湖嘗て書を

學ぶに、趙子昂を喜び、常に其の座右を放さず、餘念もなく其の墨帖を習ひけるが、如何なる故にや、何時も其の墨帖は机上へは載せざして、机の下へ卻け置けり、一日或人此の体を見、怪み問ふて曰く、「先生の趙子昂の書を敬愛するや非常にして、今に始めぬことあるが、何時も其の墨帖を、机上には置かざして、机下に放擲して之を寫さずは、日常敬愛せらるゝ、趙子昂に對し、不敬なるなからんか、」と東湖之を聞き色を正うして曰く、「ア、彼れ趙子昂は果して何人ぞ、彼れは是れ宋の末世に仕へ、累遷して翰林學士に擧げられ、頗ぶる帝の恩顧を蒙りながら、一朝宋亡び元興るに及び、忽ち身を

翻へし、節を屈して元朝に仕へ、漸く身を全うするを得たり
 彼れ書を能くし、天下第一流の名聲ありと雖ども、而かも其
 の心事に至りては、二心を懐く國賊たるを免れず、故に我れ
 其の書を愛して、其の人を鄙くるあり、」と愛憎亦公明ありと
 云ふべし。

○回顧の警竹

藤田東湖曾て國事の爲め、向島小梅の水戸邸内に幽囚せられ
 し時、板塀の上へ竹にて、忍返しを嚴重に打ち付けられてあ
 りけるが、己にして救命を蒙りて、水戸へ歸へらるゝ時、其
 の忍び返しの竹、三尺許りあるもの一本を持ち歸り、常に坐

右に置き、人に語りて曰く、「ア、是れ此の竹は、此の東湖を
 戒むる大切の竹なり、必中若し安逸の念生る時は、此の竹
 を見て、小梅の事を思ひ出せば、一の情念忽ち烟散霧消すべ
 し、」と益々以て其の竹を愛せられたりといふ。

○偉人の談笑談諷

藤田東湖の氣節は、儼として犯すべからざるものあり、而か
 も談笑の間、能く滑稽談諷の語を吐き、人をして絶倒せしむ
 ることあり、又酒間坐り角力、腕角力、枕引、耳引などをせ
 らるゝふとあり、輿に乗る時は、或は長押に手を掛けて身
 を浮かし、長押渡りをせらるゝことあり、或時詩人小野湖山

と飲と、東湖醉ふて例の滑稽に至る、湖山頻りに慷慨の状を以て、時事を論ざれば、満心慷慨の情を以て充されたる東湖は、却て洒然として湖山に向ひ、「詩人慷慨談を止め玉へ、」と云へば、湖山苦笑一番、是れは扱て餘りに情けなし、我輩を稱して詩人とは、是れにても國家の前途を憂慮する一人なり東湖曰く、夫れから我れと坐り角力を取つて見ろ、」と其の磊落豈に亦奇からせや。

◎武田耕雲齋

○開國率先の犠牲

余輩之をルーソーに聞く、「凡そ大事は、其の成功に先ちて、

必らず之れが爲めに、千百の不幸敗事あり、以て世人の耳目に顯はれざるものあり、其の成功は、成功の日に生じるものにあらざるあり、天其の希望する所を遂げんとするや、必らず先づ志士の精力徳義を徒らに費やさしめ、終には貴重不可買の人命をも、之れが爲めに失はしむるに至り、其の謀計は尽く齟齬し、其の傳記さへも後世に傳はらば、意志高尚なる烈士も、舉事尽く失策し、万に一をも僥倖すべきの形勢なきを見て、儼然として只だ時勢を恨み、其の密志をも放擲したる後ちに至り、始めて其の功を成さしむるものあり、」と是れ殆んど武田耕雲齋等、水戸烈士の爲めに云ふものに似たり。

抑もく、水戸藩士は、近世夙に正姦両党に分る、耕雲齋は實に是れ正党の首領あり、而して正党は勤王攘夷を主張するものにして、姦党は佐幕に由りて私を爲すものなり、此の如くにして兩党の軋轢、遂に兵を擧ぐ、而して正党の北に兵を擧げ、筑波山に據るもの、世に之を稱して筑波党と云ふ、田丸直諒、藤田小四郎等之れが領袖たり、又南に党を糾合し、小金原に至るもの、實に耕雲齋之れが首魁たり、既にして南北相合して一團と爲り、以て姦党に當る、耕雲齋即ち亦之れが合軍の將たり、正党已に姦党を破り、上國に上らんとして西す、途中上信の兵を破りて往く、後ち加賀藩の軍門に降り、

敦賀に幽囚せらる、名は幽囚と云ふと雖ども、而かも加賀藩の厚待至らざるを、己にして幕府の處刑する所と爲る、時に耕雲齋の辞世に曰く、

咲く梅の風に空しく散るとても

馨りは君が袖に移らん

◎吉田松陰

○主従洋行企畫の蹉跌

吉田松陰曾、江戸に出づるや、佐久間象山の雷名を聞き、往いて以て教へを乞ふ、一見恰かも百年舊知の如し、象山乃ち松陰の爲すあるを知り、大に之を愛し、松陰に謂く曰く、一聞

くが如くんば近世泰西諸國に於ては、大に理學進步し、蒸氣の力を驅りて、船車を行き、甲鉄艦波濤を蹴り、日に數百里の洋海を渡る、恰かも平地の如し、且つ一般の兵器精銳、海陸共に其の便を極む、富國強兵、天下に冠たり、此時に當り、男子たるもの宜しく奮發以て、海外万里の地に歴遊し、以て其の形勢を觀察し、彼れ外國の凌侮を防がんことを謀るべしと松陰大いに感ずる所あり、以て其の機會を待つ。

既にして其年七月、露國の軍艦長崎に入る、松陰遙かに江戸にありて此の事を聞き、大いに奮勵して曰く「ア、彼れを知り我れを知るは、兵家の一大要義、宜しく此の機會を失はせ

して、彼の國に航し、以て海外の形勢を察すべし、」密かに江戸を去りて、長崎に遊ばんとす、象山其の意を察し、詩を贈りて志を述べ、松陰已に長崎に至る、至れば則ち霞盤早く去りて、其の形影を見せ、松陰大いに失望して東歸す。

安政元年正月、米艦九隻、伊豆の下田に來り泊り、松陰大に喜び、其の僕金子貞吉と與に共に渡航せんと圖る、初め貞吉松陰に見えて教へを乞ふ、松陰曰く、「地を離るれば人なし、人を離るれば事をなし、故に事を成さんとするものは、宜しく當さに地理を窮むべし、」と貞吉乃ち地理を學ぶ、旬日にして成る、松陰曰く、「已に地理の大要を得たり、宜しく其の細に

及ぶべし、」と茲に禹貢を授く、又數日にして其の要領を得たり、松陰之を奇として謂へらく、「ア、貞吉卑賤と雖ども、而かも眼光爛々人に屈せざるの氣あり、採りて用うべし、」と乃ち勸めて、共に海外に遊ばんとす、三月廿七日、主従二人下田に赴き、暗夜に乗じ、小艇に棹して、米艦に投せんとするに、米人拒んで納れず、兩人港内に彷徨すること十有余日にして、一米人に遇ひ、窃かに書翰を托し、且つ此の夜、兩人又漁舟に乗りて出づ、生憎や舟に櫂櫂を失し、是に於て二人犢鼻褌を解き、二竹竿を縛して櫂に代へ以て舟を操縦を、不幸にして褌絶つ、更らに滯を脱して之れに代ふ、波浪高くして

舟進むを得き、二人力を極め腕を奮て艦に達す、松陰梯子に攀ぢ、貞吉纜を執る、顧みれば小舟已に本艦を離れて、搖々として其の往く所を知らざ、佩刀行季皆を舟中にあり、既にして艦中の人、二人を扶けて上らしむ、艦中我が國語を善くする者あり、出で、接す、灘さに晝間領收する所の書翰を示し、且つ曰く、「俄が艦長大に二君の篤志を嘉みす、只だ日米兩國、公議を以て修好を約す、聞く貴國は私に海外に出づるものを禁じ、」と因て此事は私に諾すべからせ、又我が艦拔錨の期も、兩三月の後ちによれば、君等宜しく一たび歸り、公裁を得て來れ、」と貞吉曰く、「僕等已に國法を犯して來る、歸

らば直ちに罪せられん、米人曰く、「今は幸ひにして暗致にして、他に一人も知るものなし、窃かに去るべし、」と乃ち一舸を装して、陸際に送る、松陰天を仰ぎ長歎して曰く、「噫天をる哉、」と既にして翌日米人其の状を以つて幕府に告げたるに土人亦二人失ふ所の行季及び佩刀を上る、而して其の行季の中、佐久間象山松陰を送るの詩あり、吏固より象山が名望を嫉み、且つ二人の爲す所、其の象山の徳薄に出づるを疑ふ、是に於て象山、及び吉田主従三人捕へられて、獄に繋がる、既にして象山は免され、二人は長州藩に檻夜せらる、當時志士の困難、想見するに餘りあり。

◎高杉晋作

○猛烈人雷艇

古來戦場に、地雷火あり、水雷火ありと雖ども、而かも未だ人雷火あるを聞かざるあり、幕末攘夷の氣焰、終に佛國軍艦と長州藩と、馬關に戦ふに、佛軍は兵器精銳、長州藩は之れに反す、左れば長州の兵は、頗ぶる困難の位置に立てり、時に高杉晋作は、長兵の參謀たり、心中圖る所あり、以て味方の士卒に謂て曰く、「諸君も知らる、通り、我兵外に援助なく孤軍大敵に向ふ、其の戦ひ頗ぶる困難なり、因りて我れ此の戦ひの始終を案するに、迎も尋常一般の手段にては勝ち難し

所詮我れは此宵の暗黒に無じ、佛艦と最期の決戦をおさんとす就いて一ツの謀路あり、其れ將た他策にあらざ、即ち敵艦を焚撃せんとするものにして、其の方法他なし、味方の士卒、各々背に硝薬を詰めたる樽を負ひ、之れに導火線を付け、以て小舟に乗り、無二無三に敵艦に漕ぎ寄せ、右の硝薬樽を背負ひたるまゝ、彼れ敵艦の中へ轉げ込む時、恰かも好し其の導火の線燃に尽きて、彼の樽中の硝薬に火の移ると同時、万雷轟然、憐はれ敵の滿艦總て火焰となるの趣向あり、但し此の謀路は、非常の手段にして、硝薬の樽を負ひ行く士卒は、敵艦へ到着するを最期に、其の身も共に、火薬の爲めに齋紛

にならんこと勿論あれば、始めより其の生命を棄つるの覺悟なかるべからず、是れ万死のうちに一生の望みもなき離れ業なれば、大剛大勇、國家を思ふ大忠臣にあらざれば、此の役は勤まり難し、誰れかある此の軍中に、大剛大勇の大忠臣はなきや、と炯々たる眼光炬の如く、屹と衆中を廻視したるに流石は其の身を犠牲に供する至難のみとして、互ひに眼と眼を見合はして、默然亦發言するものなし、時に軍中二壯士あり、高杉參謀の前に進み出で、曰く、「ア、人間僅か五十年、古來七十は稀れなりとか承るに、我等齡己に三十を越え、餘命幾何もなし、天晴御指揮に従ひ、敵艦焚撃の人雷艇と爲り

て死すべし、』と傍らに有り合ふ酒樽の鏡打ち抜き、ドンク火薬を詰め込むにぞ、「アラ勇まじき國家の爲めの大忠臣、而かも我等亦あでか、二士に劣るべきや、』と忽ち六人の士卒も亦生命を棄てんとぞ、進み出でたり、去れば都合八人の大勇士、各々酒樽に硝薬を詰め込み、之を繩からげにして、シツカと背に負ひ、導火線の長短を測り、此の位ゐの長さならば敵艦へ達する頃には、丁度樽中へ傳火するならん、と今其の火薬の爲めに焚死せんとする身をも顧みず、去らばとばかり勇氣凜然、八人の壯士は、二艘の小舟に乗り、敵艦目的に漕ぎ出でられたるが、其の心の中ぞ殊勝ある。

扱ても參謀高杉晋作は、今此の八壯士大剛の舉動に、深く感激し、壯士の勇まじき小舟、濱邊二十間程、海中へ漕ぎ出したる時まで、黙々として一語をも發せざりしが、忽ち急に大音揚げて曰く、「其の船暫らく止まれ、と號令を掛け、尙ほ引き續いて、「其の船返れ、』と命ぜ、八壯士は、今や決死の首途を止められ、何事にや合點行かざれど、參謀の命令已むを得ず、其のまゝ船を漕ぎ戻せり、晋作は乃ち八壯士に、危険ある硝薬樽を、其の背より卸させ、且つ謂て曰く、「扱て少しく、戦略を變更したれば、硝薬樽詰の謀計は、最早廢止すべし、就ては諸君等の大勇大忠感ざるに餘りあり、此の後ちと

もに、各々隊長と爲りて、天晴勇ましき働らさせられよ、と直ちに八壯士を隊長に登庸せしかば、是れより全軍の氣力大に發揚し、佛軍と戦ひて之を破れりとぞ、實にや珍らしき人雷火と云ふべし。

◎久坂通武

○御殿山洋館の焼拂ひ

徳川幕政の末、朝廷の意見と、幕府の議と、動もれば相合はせ、茲に長州藩侯父子は、共に京師に出で、薩土二侯と議し、朝幕の調和を謀り、以て國是を定めんとす、乃ち毛利侯其の世子毛利元徳として天子の詔を奉じて江戸に至り、幕府

の諸臣と議せしむ、即ち松陰門下の聯壁と稱せられたる、久坂通武、高杉晋作の二傑従て、往く殊に通武は世子に従ひ、周旋甚だ勉む、而かも久うして決せせ、是に於て通武歎じて曰く、「ア、肉食の徒、共に謀るに足らせ」と密かに晋作と議して、將さに横濱に至り、以て洋館を焼かんとし、二人共に脱して其の程に上る、世子之を聞き大いに喫驚し、直ちに馬を馳せて之を追ふ、大森に至りて、漸く二人に及び、之れに謂て曰く、「ア、家君天下に先ちて大義を唱ふ、我れ亦密旨を奉じて此に至る、其の事たるや重且つ大なり、我れ汝の言を以て、心腹とし又股肱とす、而して今や輕舉我れを棄て、

自ら暴動危殆の事に陥らんとすは何ぞや、」と且、諭し且つ泣く、一言一語、性靈の本源より出で、大に二人を感動す、即ち通武と晉作とは、共に流涕頓首、謝して曰く、「ア、吾等度景狭小、殆んど公を過らんとす、死して罪に餘罪あり、今より唯々謹んで命に従はん、」と共に江戸に歸る、既にして世子は江戸に留るゝと數月、終に其の要領を得老して西歸す、通武は聊か思ふ所あり、獨り請ふて江戸に留る。

是れより先き幕府、英人の爲めに館を、高繩の御殿山に築く頗ぶる宏壯華美を尽くす、既にして漸く將さは工を竣らんとす、志士皆を切齒扼腕して之を誹謗す、時に通武以爲らく、

ア、此の高繩の地たるや、江戸の要阨たり、洋夷をして此に居らしむるは、是れ猶ほ盜に庫を守らしむるがごとし、危険焉れより甚だしきはなし、と一夜密かに往いて之を焼く、志士皆を双掌を拍て快と稱す、幕府大に驚き且つ怒り嚴密探偵を尽すと雖ども、終に其の何人たるを知る能はず、志士之を聞いて、益すくゝ以て快と稱す。

◎二 宮 尊 德

○自鳴鐘を聴くの美談

天保の頃、荒蕪開墾、廢家再興に名あり、舊小田原領の偉人二宮尊徳の事蹟は、近世世人の大に注目する所と爲れり、茲

に野州烏山の城主、大久保侯の菩提寺を天性寺と云ふ、天保の頃の住持圓應と云ふもの、頗ぶる博學にして、其の性剛邁かり、嘗て河國櫻町の陣屋にある、二宮尊徳と知遇あり、是れ圓應國事を憂ひ、飢民救助の爲めに、此の知遇を得たるあり、然るに其の後ち、或時圓應櫻町に至り、一二日、二宮の傍らにありて默然たり、既にして卒然暇を乞ふ、尊徳曰く、「和尚來ること豈に啻からんや、今一言をくして歸るは何ぞや圓應謹み答へて曰く、「左ればにて候、初め拙僧の來りし時は聊か烏山家再興の事に就いて、拙僧の思慮する所あり、其の思慮果して當るや否や、躊躇して決せざる所あり、以て其の

當否を問はんとして來りしあり、然るに先生の目前にあること二日、腦中已に了然たるものあり、以て敢へて先生を煩げそに足らせ、烏山の處置已に決せり、必ら老勞し玉ふこと勿れ、」と其のまゝ去る、尊徳跡にて歎稱して曰く、「圓應烏山にありて國事を憂ひ、國家の大事を問はんとして、遙かに此の地に來る二日にして、敢へて一言を待たせ、其の事已に腦中に了然たり、今の時に當り、彼の僧の如きものは、殆んどかし、」と頗りに歎賞して止まざりしといふ。

鬼雄外史曰く、余輩嘗て楊廷秀の著はされし、『庸言』を閲みと、書中云へるゝとあり、「或人問ふて曰く、回や我れを

助くるものに非らず、我が言に於て説はざる所をし、と聖人の言に於て悦ばざる所なくして、而して助くるに非らずと曰ふは何ぞや、楊子曰く、鐘は自ら鳴らざり、撞いて後ちに鳴る、夫子は万石の鐘あり、回や撞かざりて、其の自鳴を聽けば、則ち鐘の鳴るや數さざり、云々、と所謂炯眼、紙背に徹するの適評と云ふべし、乃ち此の顔回の評、移して以て圓應の事に應用すべし、即ち二宮尊徳は、國家經綸の万石の鐘あり、鐘豈に撞いて後ち、始めて其の音ありとせんや、未だ人の之を撞かざるの前、早く已に自ら鳴るの音は、其の鐘中にあるあり、達人獨り能く之を聽く、彼の圓

應は、二宮万石鐘の未だ撞かざるもの、早く已に其の鐘中にありて自ら鳴るの幽音を聞けるあり、是れ敢へて二宮の口を開くを待たせして、圓應早く已に其の旨を得て、鳥山に歸れる所以あり。

◎河村瑞軒

○山師の故事來歴

人動もそれば山師々々と云ふ、而かも其の山師の故事來歴を知りたるもの稀れなり、今河村瑞軒の逸話として之を語らんに、抑もま山師とは、其の始めは川師と云へるより起りしあり、其の故は昔時、有名なる角倉了以あるもの、大いに舊

屬して、京都大坂の間に通る、淀川の水路を開鑿して、大いに水利を興したれば、世人此の類の事業家を呼んで、川師とは稱せり。

然るに其の後ち河村瑞軒は、關東の有名なる事業家にして、本曾山を開きて、大に山業家の名を博したり、是れより時人遂に一般に、大膽なる事業家を曰して、山師と稱するに至れり、但し當初山師とは、敢へて僥倖を期せる等の意はなく、實に精勵刻苦、堂々たるものありしが、沿習の久しき、後ち終に僥倖を期するの意とは爲れり、是れ山師の一變革なり、孰れども山師とは、河村瑞軒に始まれるものなり、又江戸材

木商の、本曾山中に材木の買出しに行けるもの、偶ま／＼小兒の涕泣するものあり、乃ち材木商傍ちの金箸を執り、小判に小穴を穿ち、之れに小紐を通し、鑑將として音せるを興に小兒の玩弄として興へしこと、世に之を紀伊國屋文左衛門の爲せしふとして傳ふれど、是れ誤傳にて、其の實は河村瑞軒の爲せしことあり、今序での筆鋒に、聊か之れが談傳を正すこと爾り。

鬼雄外史曰く、因に記す、米國に投機大統領の名を轟かしたる、ダニエル、ドクユーあるものあり、曾て屢ば／＼牛を賣りて、意外ある巨利を占めたることあり、今其の秘密

の玉手箱を開かんに、先づ牛に多量の食鹽を與ふれば、彼れ牛の性たる、元來大いに鹽を嗜むものあれば、彼れ喜んで飽くまでも之を嘗む、此の如くにして已に多くの鹽を嘗むれば、彼れ牛は忽ちにして大いなる渴を來たして、水を望む、此の機を測りてドリユーハ、多くの水を與ふれば、彼れ咽喉の渴き切りたる牛は、大いに嬉し喜んでガブくとして之を呑み、彼れ其の腹の膨脹するに至らざれば止まざるべし、去ればドリユーハ、其の美事腹の膨脹するを見斗らひ、之を市に率き出し、肥満の牛と見せ、意外にも非常の値に賣りて、大いに利潤を博し得たり、去ればドリユー

ハ、此の點策を以て、大いに豪富を致し、後ち「ユリー」會社の社長と爲りしが、先きに牛を肥したる奇計を應用し巧みにも空株を發行し、以て大いに會社の外形を飾り、其の相場に由りて、大いに暴富を致たり、是れより米國に於ては、空株のことを水株と云ふに至れり、蓋し牛の腹を肥したる水を云ふなり、嗚呼川師と云ひ山師と云ひ、將た又水株と云ふ、何方も相似たる商策と云ふべし、因て聊か參照の爲め、茲に之を附記と云爾。

◎岩崎彌太郎

○拜金宗